

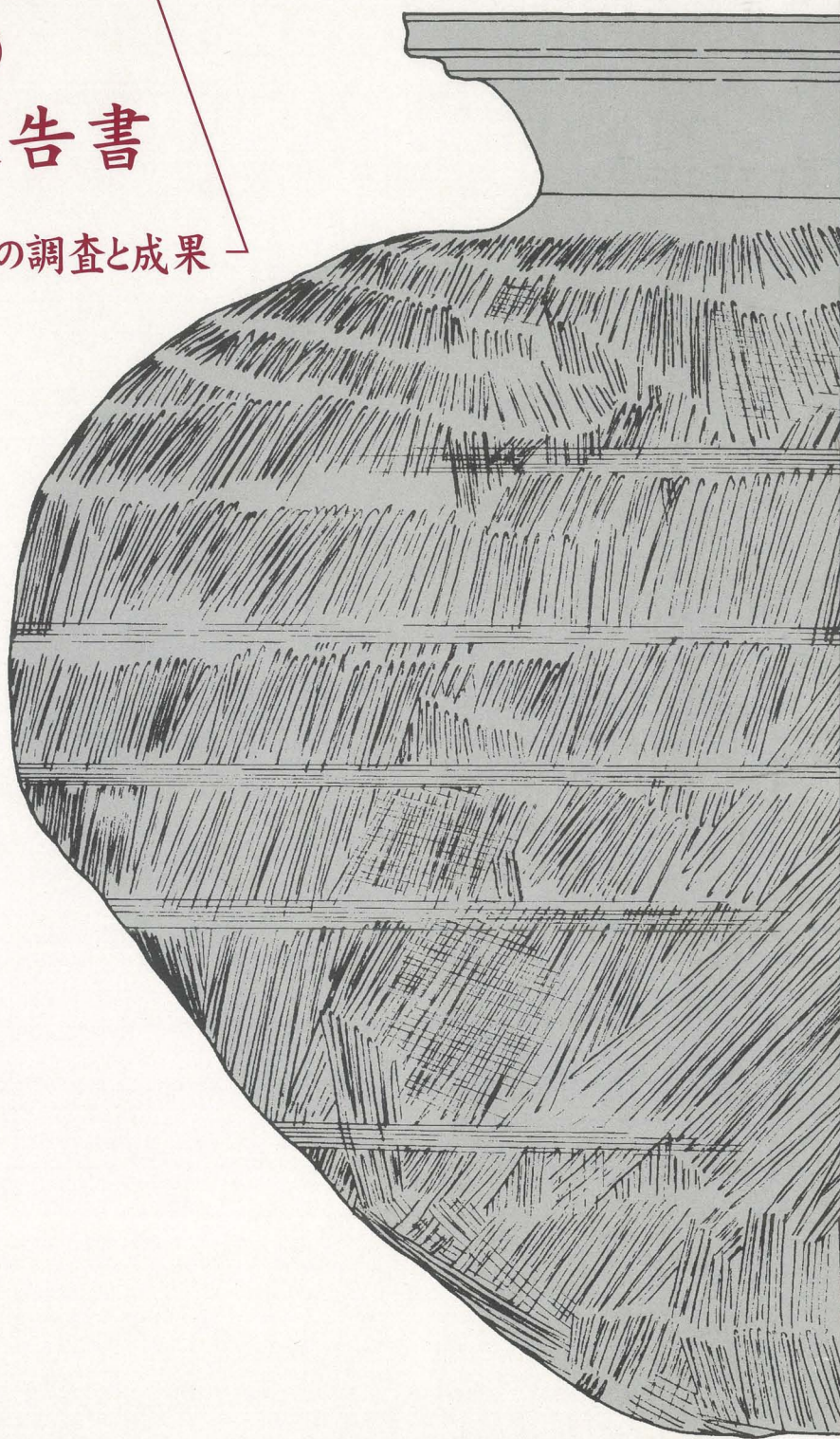
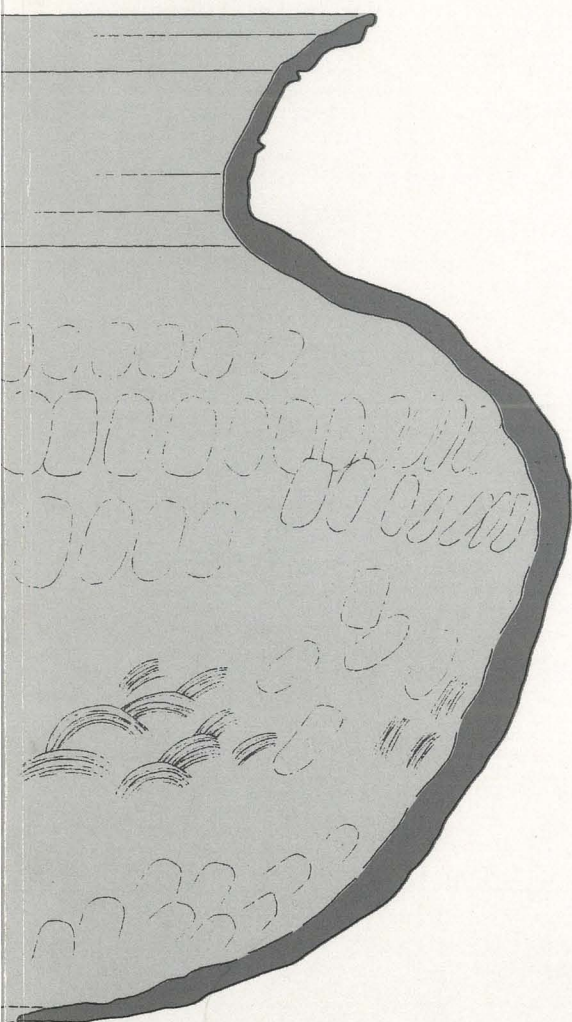
— 芦屋市文化財調査報告 第58集 —

# 若宮遺跡

(第42地点)

## 発掘調査報告書

— 須恵器集中遺存地点の調査と成果 —



— 2005年 3 月31日 —

— 芦屋市教育委員会 —



# 巻頭写真 I



2区 SD101 検出状況（南から）



2区 SD101 完掘状況（南から）



## 巻頭写真 Ⅱ



2区 須恵器検出状況（南から）



2区 須恵器検出状況（北から）

## 序

若宮遺跡は、平成7年に発生した阪神・淡路大震災の震災復興の一環として芦屋市が施工した若宮地区住環境整備事業の若宮町住宅建設に伴って初めてみつかった、本市の発展の黎明期を知る集落遺跡の一つです。縄文時代から始まるこの遺跡は、弥生時代の初めには海浜部に営まれた農耕集落として定着し、古墳時代には、打出丘陵の古墳群の中に入って墓地の一部となるようです。その後、古代・中世へと水田や畑の生産地帯、農村風景が展開し、近世、江戸時代の後半期には、この低所でも新田開発が行われました。

このように、若宮遺跡は旧海岸線から阪神沿線にかけての市域南部に住み着いた、私たち芦屋の祖先のひとびとの土地開発の歴史を知る上に貴重な考古学上の物的資料を与え続けてきました。このたび、発掘調査が行われた第42地点では、完全な形をした須恵器の一群が突如姿を現し、その性格や歴史的な意義をめぐって新しい知見がもたらされたと聞いています。その調査成果を報告する本書が、末永く多くの文化財関係機関と市民・研究者のみなさまのお役に立つことを願ってやみません。

平成17年3月31日

芦屋市教育長 藤 原 周 三



## 例 言

1. 本書は、芦屋市文化財調査報告第58集で、若宮遺跡（第42地点）の発掘調査成果を報告する。
2. 若宮遺跡（第42地点）は、兵庫県芦屋市打出小槌町174番地に所在し、民間が行う専用住宅4棟の建設と擁壁工事に伴って事前調査された。
3. 発掘調査は、芦屋市教育委員会が調査主体となり、森岡秀人（文化財課主査・学芸員）と坂田典彦（文化財課非常勤嘱託・学芸員）が担当し、平成16年4月5日～4月9日の5日間で実施された。
4. 発掘調査費並びに出土遺物・諸資料の整理作業費、報告書の刊行費は、原因者である新星和不動産株式会社が全額負担した。
5. 発掘調査・整理業務・報告書刊行業務の体制は下記のとおりである。

調査責任者	芦屋市教育長	藤原周三
調査総括	芦屋市教育委員会社会教育部長	高嶋 修
調査事務統括	同 文化財課長	西川孝夫
調査事務担当	同 文化財課主査	森岡秀人
調査総務担当	同 文化財課主査	田中尚美
確認調査担当	同 文化財課係員(学芸員)	竹村忠洋
発掘調査・整理・報告書担当	文化財課主査(学芸員)	森岡秀人
	文化財課非常勤嘱託(学芸員)	坂田典彦
調査・整理補助	文化財課臨時的任用職員	楠 貴大・天羽育子
6. 資料整理・報告書作成作業は、森岡・坂田が担当し、その指導のもと、下記の分担で行った。

遺物洗浄・注記—天羽・楠	遺物接合—天羽・高橋美代子・楠	遺物実測—天羽
挿図作成・トレース—天羽・楠	文章入力・構成—楠	校正—森岡・坂田
遺物撮影—坂田	作業協力—仲谷由利子・山本麻理	表紙・裏表紙デザイン—森岡
7. 撮影は、35mmリバーサルフィルム、35mmモノクロフィルム、デジタルカメラを使用し、記録した。
8. すべての出土遺物・測量図面等は、三条整理事務所で整理し、保管している。
9. 土層および遺物などの色調・色調記号は、『新版標準土色帖1998年版』（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修）を使用した。
10. 本文・図面等に示す略号は、下記の通りである。  
M.N.：磁北、T.P.：東京湾平均海面値、P1：調査杭No 1、SD：溝跡、SK：土坑・土墳
11. 本書の執筆・編集は、森岡秀人・坂田典彦が担当した。



# 若 宮 遺 跡

(第42地点)

## 発掘調査報告書

—— 須恵器集中遺存地点の調査と成果 ——

序 ..... 芦屋市教育長

例 言

### 本 文 目 次

#### I. 調査に至る経緯

- 1. 調査動機..... (森岡秀人) ..... 1
- 2. 調査の目的といきさつ..... (森岡) ..... 1
- 3. 調査体制と報告書の作成協定..... (森岡) ..... 2

#### II. 若宮遺跡と周辺環境

- 1. 既往調査の概要..... (森岡) ..... 3
- 2. 遺跡周辺の自然環境・歴史環境..... (森岡) ..... 5

#### III. 発掘調査と出土遺物

- 1. 発掘調査の方法..... (坂田典彦) ..... 9
- 2. 調査の経過..... (坂田) ..... 10
- 3. 1区の見所..... (坂田) ..... 12
  - (1) 基本土層
  - (2) 検出遺構
  - (3) 出土遺物
- 4. 2区の見所..... (坂田) ..... 14
  - (1) 基本土層
  - (2) 検出遺構
  - (3) 出土遺物

#### IV. 調査のまとめ

- 1. 本地点の性格をめぐって..... (坂田) ..... 21
- 2. 出土須恵器についての二、三の考証..... (森岡) ..... 22

引用・参考文献目録..... 25

報告書抄録



## 巻頭写真目次

- |                        |                       |
|------------------------|-----------------------|
| I 上段 2区 SD101検出状況（南から） | II 上段 2区 須恵器検出状況（南から） |
| 下段 2区 SD101完掘状況（南から）   | 下段 2区 須恵器検出状況（北から）    |

## 挿 図 目 次

- |                        |  |
|------------------------|--|
| 第1図 芦屋市内主要遺跡分布地図……………4 | 第9図 1区 土層断面図 ……………13                     |
| 第2図 若宮遺跡調査地点分布図……………6  | 第10図 1区 出土遺物実測図 ……………13                  |
| 第3図 兵庫県と芦屋市の位置……………7   | 第11図 2区 土層断面図 ……………15                    |
| 第4図 調査区配置図……………9       | 第12図 2区 第1遺構面平面図 ……………16                 |
| 第5図 調査開始前の状況……………10    | 第13図 2区 SK101・102平面・立面図……17              |
| 第6図 作業風景……………10        | 第14図 2区 出土遺物実測図 ……………19                  |
| 第7図 完掘状況……………11        | 第15図 2区 出土遺物実測図 ……………20                  |
| 第8図 終了立会風景……………11      | 第16図 芦屋市内および近隣地出土関連<br>須恵器実測図比較集成……………24 |

## 図 版 目 次

### 図版①

- 調査地遠景（北西から）
- 調査地遠景（西から）
- 調査前の状況（南西から）
- 調査開始状況（北から）
- 1区 機械掘削後の状況（西から）
- 1区 完掘状況（北から）
- 1区 東壁土層断面（西から）
- 1区 北壁土層断面（南から）

### 図版②

- 2区 機械掘削風景（南から）
- 2区 機械掘削後の状況（南から）
- 2区 調査風景（南から）
- 2区 SD101検出状況（東から）
- 2区 SD101完掘状況（南から）
- 2区 須恵器検出状況（南から）
- 2区 北壁土層断面（南から）
- 出土遺物

### 図版③

- 3層出土遺物（1:1区、他：2区未実測）
- 第1遺構面出土遺物（SK101、SD101、4層）
- 3・4層出土石器
- （下段中央：チャート、他：サヌカイト）

### 図版④

- SK102 出土土器 4
- SK101 出土土器 2
- SK101 出土土器 2 底部穿孔  
（底部穿孔・外面）
- SK102 出土土器 5
- SK102 出土土器 5 底部穿孔  
（底部穿孔・内面）



# I. 調査に至る経緯

## 1. 調査動機

平成16年2月10日、芦屋市教育委員会文化財課に若宮遺跡の周知範囲内において土木工事に伴う埋蔵文化財発掘届出書が提出された。文化財保護法（昭和25年法第214号）第57条の2第1項の規定に基づくもので、届出者は大阪市北区西天満5丁目6番4号、新星和不動産株式会社代表取締役社長小林廣吉氏で、専用住宅（木造2階、一部3階・4棟）新築に伴う開発事業であった。事業地の敷地面積は402.71㎡あり、工事着工は平成16年3月末までとされた急がれる計画であった。

本市教育委員会は、提出された書類を審査し、建築計画の概要を把握するとともに、周知の埋蔵文化財である若宮遺跡との関係について、地権者と具体的に協議した。提出された届出書によれば、基礎掘削深度は現地表下1.81mと深く、基礎部分の掘方は全面で、擁壁部分の工事も深部に及ぶものであった。したがって、既往の調査データとの比較において、工事掘削による遺構や遺物包含層の損壊はまぬがれ得ないと判断し、遺跡の取扱いを決定するための確認調査を実施することとした。

確認調査は、文化財課学芸員の竹村忠洋を担当者として、平成16年3月2日に実施した。確認調査については、新星和不動産株式会社に費用などで協力いただいた。確認調査はトレンチを2ヶ所設定し、5.95㎡の面積を試掘した。確認深度は現地表下1.5m強で、一部分層発掘を行っている。その結果は、「確認調査報告書」として事業者へ提出済であるが、試掘坑内で遺物包含層が確認され、本発掘調査の必要性を判断するにあたっては、第2次確認調査の実施が不可欠と報告された。調査に要する日数も実働5日以内の方針となった。

今回の調査はこれを受け、第2次確認調査として森岡秀人・坂田典彦を発掘担当者として実施をみたものであるが、本章第2節で後述するように、調査途中で本発掘調査を行う必要性が生じ、第2次確認調査を充実させる形で記録保存を図るための本発掘も実施した。（森岡秀人）

## 2. 調査の目的といきさつ

確認調査を実施した結果、南側駐車場に設定した第1トレンチでは、現地表下82cmから始まる第4～6層が古代末～中世の遺物包含層で、西側駐車場に設けた第2トレンチでは、現地表下71cmから始まる第9層が古代末～中世の遺物包含層であった。盛土下の耕作土壌は完存しており、その下の包含層についてはその性格や成り立ちを調べる必要があった。

また、第1トレンチの所見では、包含遺物の破片の大きさが下層にいくほど大きくなる傾向があり、現状では遺構が断面観察できないものの、層理面では遺構の確認を行う必要もあった。また、確認調査で出土した遺物は、第4・5層から土師器片3点、須恵器片1点、第6層中から土師器片6点、須恵器片1点と稀薄なものであったが、一部にはフィゴの破片と覚しき被熱溶解の土師質土製品も認められ、遺跡の性格にも関わる遺物が散見された。したがって、第2次確認調査では遺構の存否や時期的変遷の究明を目的に発掘を進めたが、第Ⅲ章で詳しく取り上げるように思わぬ遺物群が検出され、調査目的を大きく変更し、急遽調査区要部の本発掘へと調査方針を切り換え、所期の目的以上の発掘成果を得ることができた。

なお、第2次確認調査に入る前の事前協議は、平成16年4月1日に地権者・設計者・安西工業(株)を交えて行い、発掘調査の中間過程においても、現地で緊急協議を行った（4月8日）。（森岡）

### 3. 調査体制と報告書の作成協定

第2次確認調査以降の発掘調査体制は、下記のとおりであり、出土資料の整理、報告書の刊行体制もこれに準じた。

調査責任者	藤原周三（芦屋市教育委員会教育長）
調査総括	高嶋 修（芦屋市教育委員会社会教育部長）
事務統括	西川孝夫（芦屋市教育委員会文化財課長）
総務担当	田中尚美（芦屋市教育委員会文化財課主査）
発掘調査担当	森岡秀人（芦屋市教育委員会文化財課主査・学芸員） 坂田典彦（芦屋市教育委員会文化財課非常勤嘱託・学芸員）
調査・整理補助員	楠 貴大（芦屋市教育委員会文化財課臨時的任用職員） 天羽育子（芦屋市教育委員会文化財課臨時的任用職員）

確認調査の内容に関するとり決めは、市教育委員会と原因者との周知な協議を経て文書化し、「埋蔵文化財第2次確認調査に関する協定書」として双方確認の上、平成16年4月2日、協定書を締結した。

調査終了後は、出土資料の分類整理、報告書の印刷・刊行について、新たに事業としての協定書追加事項確認書を結び、平成16年度事業として、平成17年3月31日に報告書公刊を約して諸作業を進めていった。協定書追加事項確認書は、新屋和不動産株式会社代表取締役社長 小林廣吉を甲とし、芦屋市教育委員会教育長藤原周三を乙として、平成16年4月9日に締結した。

出土資料の整理は、洗浄・注記・台帳登録・復元・実測・整図・レイアウト・報告書作成などに分かれるが、平成16年4月12日より開始し、平成17年3月31日の本書の刊行をもって完了した。

（森岡）



## Ⅱ．若宮遺跡と周辺環境

### 1．既往調査の概要

若宮遺跡は、阪神・淡路大震災の復旧・復興事業に伴って、埋蔵文化財包蔵地の確認が乏しかった阪神電鉄沿線の旧海岸部近くで新出した遺跡の一つである。したがって、遺跡が発見されてからの日は浅い。しかし、急速に進められた公私の震災復興事業により、調査件数は加速をつけて増し、今日42地点目の調査が行われるに至っている（第1・2図）。

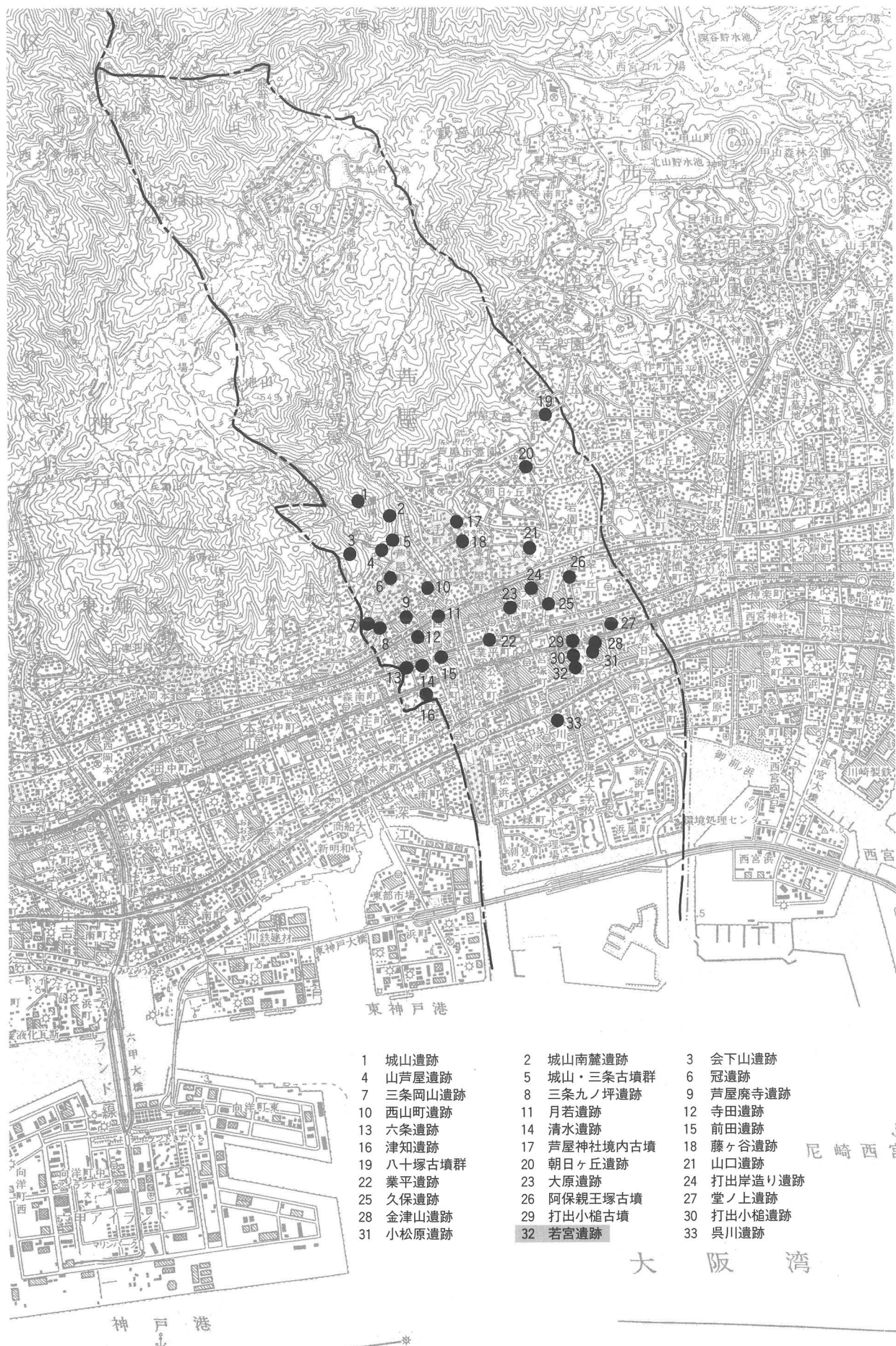
若宮遺跡の既往調査については、〔竹村2002〕や〔森岡2002a〕に既に詳しい記述がなされている。主として第34地点までの内容に言及したものだが、その時点で発掘調査が13地点分実施されている。その他は確認調査止まりか、工事立会や慎重工事の扱いである。ここでは、本発掘調査が実施された13地点の概要について、時代・時期別に再編してごく簡単に紹介しておきたい（第2図）。

本遺跡での人間の往来がみられる最初は縄文時代である。第1地点の第4遺構面54層では滋賀里Ⅱ式の縄文晩期前葉の土器片が検出されており、現状では遺跡内最古の遺物として注目される。年代は下がるが、第4地点第4遺構面SR02bの滋賀里Ⅲb～Ⅳ式の土器片や、第10-1地点第9層の滋賀里Ⅲb式の土器片も認められ、晩期後半への移行が若宮遺跡の中で進んだことが理解できる。突帯文土器段階では、旧河道との関係を保ちつつ、土器自体は増加し、限られた地区に定着的な集団が現れたようすが知られる（第3地点第4遺構面、第4地点第3遺構面SR01ベース・被覆層・土器溜まり、第11地点第8層、第16-1地点流路ベース第6層、第16-2(1)地点、第17-2地点流路部第9層、第32地点第3トレンチ第5a層、第34地点溝2埋土2）。その分布範囲は東西南北100m以上に及ぶ。この付近に滋賀里Ⅳ式～口酒井式期の縄文集落があったとみるべきであろう。二条突帯が成立する船橋式・長原式が不在であるとともに、弥生土器との伴出関係も明証できないため、突帯文単純期の集団活動を考えざるを得ない。このことは、大阪湾北岸地域における縄文時代・縄文文化の終焉や弥生時代の到来、弥生文化の着床を考える上に重要である。

弥生時代を迎えると、本格的な農耕生活が始まるが、弥生前期～中期初頭の竪穴住居跡が第2地点第4遺構面、第5遺構面で併せて数棟検出されている。磨製石包丁や土坑墓・土器棺墓を伴い、本来は一定の集落構造を備えた農耕村落が展開したことが確実視できよう。第4地点でも、第2遺構面においてⅠ・Ⅱ様式段階の竪穴住居5棟、土坑9基が見出されており、南北50m以上の居住域の存在が指摘できる。第1・3地点では該期の土器が出土するも、東へと遺構は広がらず、東西は40m以内の範囲に居住の場が限定されるようである。縄文晩期後半に埋積充填の完了していた旧河道が微高地化した場所に居を構えた、海浜部に特徴的な初期農耕集団の姿が想像できよう。遠賀川式土器の上限は摂津Ⅰ-3様式であり、突帯文集団の共存はまず推察しにくい時期と考える。

若宮遺跡は、弥生時代中期中葉から後期前半にかけて大きく断絶する。第16-2(2)地点などでⅡ-3様式あたりまでの土器を出すのを最後に、次は後期末～終末期まで土器自体の出土がない。当該期に至っては、第1・2・3・11・16・25・34の諸地点で土器が出土しており、かなり広範に生活域が拡大している。第11地点では方形周溝墓とも解される溝1条と供献土器の出土があり、Ⅵ-1様式までの墓域があったようであるが、判然としない。

古墳時代に入ると、古墳の存在を示す円筒埴輪や形象埴輪の出土が多見される。阪神電車を南に越えた若宮遺跡においても埴輪や須恵器が多く の地点で確認でき、翠ヶ丘丘陵上の古墳群の南縁部が若宮遺跡を包括することは間違いない。第1・3・4・10-1・10-2・16-1・16-2(2)・17-1・17-2・25・



第1図 芦屋市内主要遺跡分布地図（1：50,000）



34の諸地点で5世紀後半から6世紀前半の資料が検出されている。後に考察するが、本遺跡周辺にも住吉宮町古墳群や長原古墳群のようなタイプの中・後期古墳がかつて遺存した可能性が高く、第34地点などでは葺石とみて大過ない石材も埴輪と共に出土している。墳丘が既に削平された大小の古墳が眠っているとみてよいであろう。

古代の様相については、不分明な点が多い。第10-1・11地点や第19地点において、奈良・平安時代の若干の資料が看取できるが、該期の大きな集落が形成された気配はない。これに続く、中世の前半期も資料自体は貧困である。10～13世紀段階には土地開発を含めてふるわなかった時期らしく、15～16世紀の中世後半期に至って、ようやくはっきりした耕作地が展開するようになる（第10-1・10-2・25地点など）。南北朝期には、本遺跡特有の現象が起こっている。牛骨片・馬骨片・鹿骨片などがまとまって出土するようになり、第10-1地点第2遺構面SR01埋土や同第4面SR02、8層上面SX01、SX02などの例を典型となし、第25地点第3遺構面落ち込み上層などでも多数の獣骨が検出されている。第34地点南北トレンチ護岸施設では、14世紀前半期の土器・陶器や礫とともに多数の獣骨が一括出土し、注目された。本遺跡の中心部やや南寄りの地域において集中的に確認されており、切断痕跡や解体痕跡がうかがわれる点も特異である。

以上、既往調査の要点を略述してきたが、本遺跡が10年前には未周知であったことを思うと、隔世の感がする。（森岡）

## 2. 遺跡周辺の自然環境・歴史環境

芦屋市は、兵庫県南東部に位置し、大阪湾に面している（第3図）。市域は南北に細長く、東西2.5km、南北8.3km、面積は18.57km<sup>2</sup>を測る。市域の北側半分以上は六甲山地であり、中生代白亜紀後期の花崗岩を基盤岩とする山地斜面が形成されている。市域の南半は、六甲の山麓部に新生代第四紀更新世の後半から完新世に形成された段丘と扇状地が存在し、市内を芦屋川と宮川が流下して大阪湾へと注ぐ（第1図）。

若宮遺跡は、現若宮町を中心とするが、一部北方の打出小槌町へと続き、上記した宮川の下流域に位置する。本遺跡は先記したように、縄文時代晩期よりその営みを開始するが、市内の縄文遺跡は近年急増しており、早期・前期・中期・後期・晩期のすべての時期のものが出揃っている。縄文早期からの遺跡としては山芦屋遺跡、前期では今日でも標識的位置を占める朝日ヶ丘遺跡があり、業平遺跡や月若遺跡でも遺構が確認されている。後期の土器は寺田遺跡や芦屋廃寺下層遺跡でも出土し、縄文晩期に至ると、市内8遺跡で生活した人々の往来が看取できる。

弥生時代に入ると、本遺跡とともに海浜部に近いところを中心に農耕生産活動が始まるようである。有力な遺跡として、本遺跡以外に寺田遺跡・業平遺跡・清水遺跡などが立地し、前田遺跡ではAMS法（炭素C14年代測定法）により弥生前期水田跡の存在が立証された〔森岡編2004〕。

弥生中期以降は扇状地上面での生活も活発化し、中期後半には六甲山地前山に高地性集落が出現する。会下山遺跡や城山遺跡はその典型であり、標高180～250mの山頂尾根部にも竪穴住居をつくっている〔村川・石野・森岡1985〕。

弥生時代後期末～古墳時代前期初頭には、沖積扇状地上での生活跡が着実に増加し、多数の遺構・遺物が検出されるようになる。芦屋川右岸の寺田・月若・芦屋廃寺・三条九ノ坪・冠の各遺跡は、この時期、面的にも連なる様相をみせ、居住空間は数100m規模のものとなって発展する〔森岡1988〕。月若遺跡近辺では滑石製模造品などが卓越する。7世紀初頭に入ると、竪穴式の建物は掘立柱形式のものへと移行を進め、寺田遺跡などでは時期的な検討や空間分析が進められており〔前田ほか編2002、





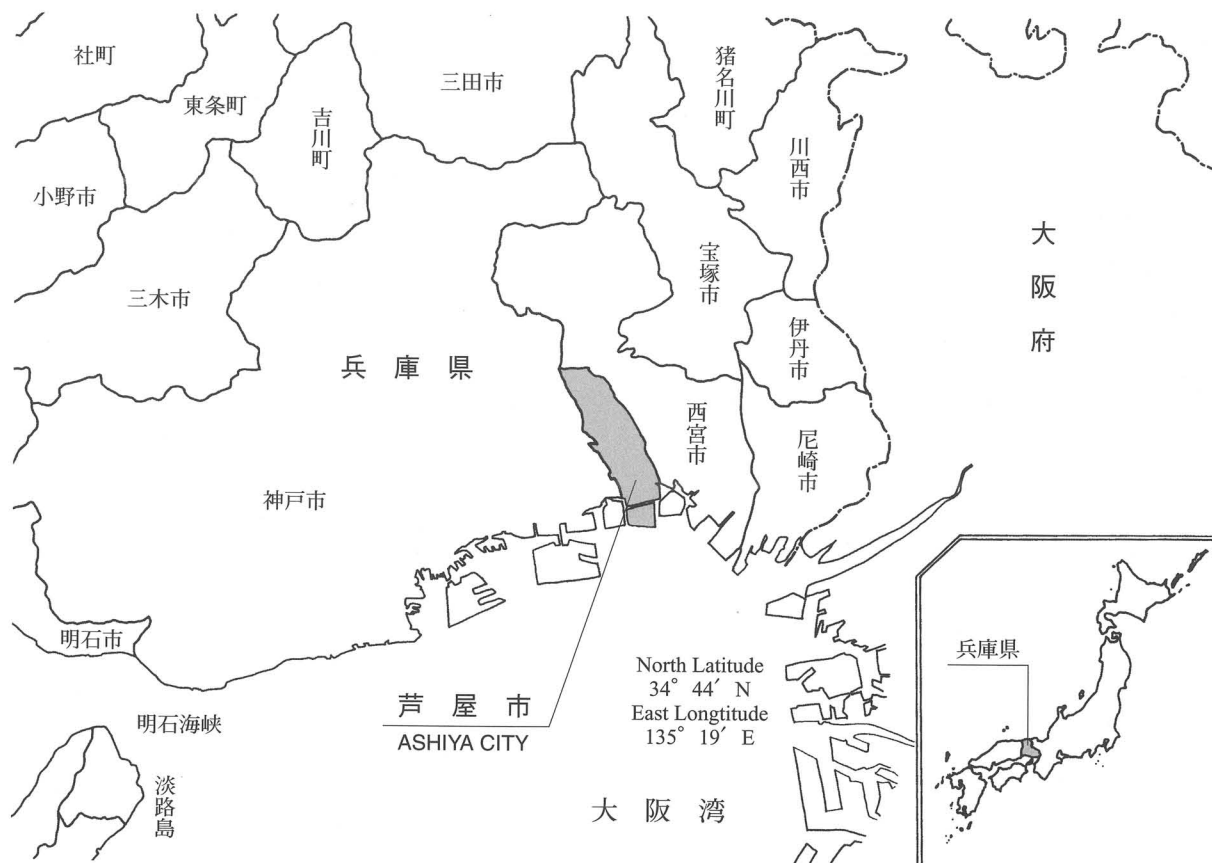
森岡2003]、摂津地域の動態と関連した変化が読み取れる。

古墳は古墳時代を語る場合、欠かせない存在であるが、前期古墳は数少ない。阿保親王塚古墳は、4世紀前半に築造された市内最古の古墳で、かつて多数の中国鏡が出土している。中期の古墳はひき続き、打出翠ヶ丘丘陵の上に築かれており、5世紀代では金津山古墳や打出小槌古墳が海に前方部を設けた前方後円墳として著名である。打出小槌古墳の前方部前端周濠内からは、全国的にも類例の少ない緑彩を施した形象埴輪が出土しており、その意匠や顔料は九州系のものとされる〔森岡2002b、橋口2004など〕。

古墳時代後期には、六甲山地山麓部に数多くの群集墳が造営される。西から三条・城山・笠ヶ塚・天神山・八十塚などの古墳群が形成され、ごく最近、業平遺跡でも古い型式の横穴式石室が1基確認されている。扇状地の上にも中期から経営を開始するやや古式の群集墳が存在したようで、墳形は円墳と方墳が混在する状況にある。

群集墳の造営は6世紀前半から一部開始されるが、その多くは6世紀後半からであり、最盛期は7世紀に入ってからと思われる。その終焉には、7世紀後半の築造にかかる城山18号墳、巨石を用いた旭塚古墳、多角形の墳形を示す城山3号墳など特異なものも営まれ、渡来系の色彩がミニチュア甕形土器などに投影される。文献史料に数多く登場する渡来氏族と間接的なつながりをもつことは、考えられてよい。

古代には、寺田遺跡や三条九ノ坪遺跡で重要な干支年銘木簡や墨書土器「大領」「少領」が出土している。芦屋廃寺は、古代摂津国菟原郡唯一の白鳳寺院で〔村川1970・71、森岡・村川1996〕、近年の調査では寺院建物の基壇も検出されるようになった〔寒川・森岡・竹村2001〕。「寺」と刻印された須恵器の存在なども注目されよう〔芦屋市教育委員会2001〕。芦屋地方は畿内制の西端に近く位置し、



第3図 兵庫県と芦屋市の位置

芦屋駅の存在など東西交通、山陽道の要衝でもあった。また、藤ヶ谷遺跡は古代葬制を考える上に貴重な資料をもたらしてくれた〔森岡編2003〕。発掘で検証できた火葬墓として阪神間の市街地では稀有な存在であるが、芦屋廃寺の所用瓦が施設の一部に使用されたことなど興味深い。

中世に入ると、生活域は一段と拡大する。芦屋川扇状地上では集落の形成が進み、宮川水系でも耕作地の開発が一気に進む。若宮遺跡もその一つであり、近世四ヶ村の原型は室町時代には整ってくるものと考えられる。

近世以降の遺跡については、原則として埋蔵文化財の調査対象から除外されており、残念ながらその実像が積極的にはつかまれている。その中にあって、徳川氏が元和6年（1620）から10年間再築事業を展開した大坂城は、この芦屋市を中心とする六甲山系の山々に関連遺跡を明確に残したことで特筆されよう。石垣に供された石材の多くが六甲花崗岩であり、その採石丁場が山麓部の台地や山域に良好に遺存する。昨年はその大型調査が開発に伴って実施され、大名を特定する丁場や石材を搬出するルートなどが刻印石や矢穴石の加工過程などにより解明されつつある〔芦屋市2004〕。

以上、垣間見たように、現在は国際文化住宅都市として全国的に名高い芦屋市であるが、近世以前の長い歴史にも多くの重要な足跡をとどめている。（森岡）

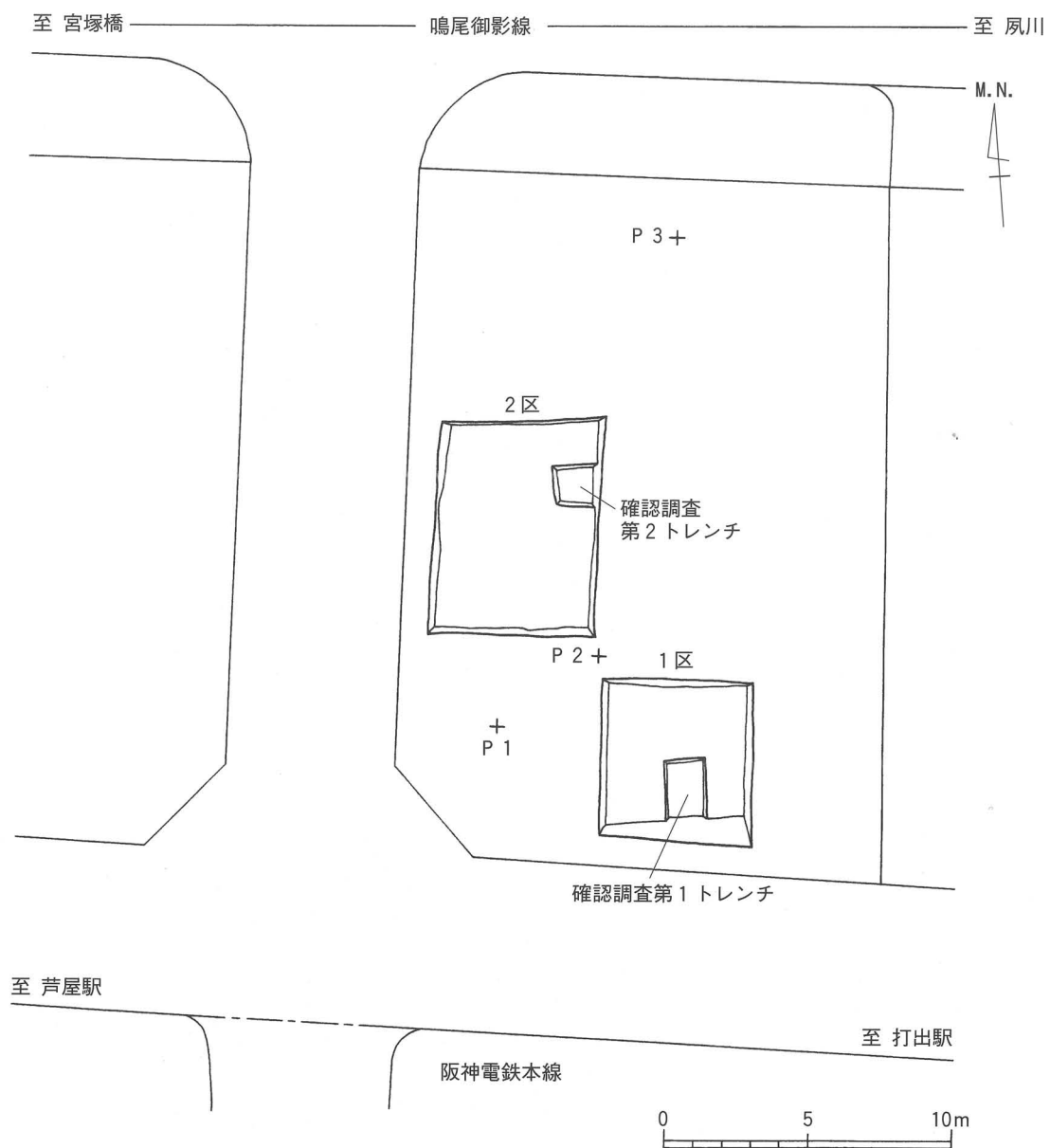


### Ⅲ. 発掘調査と出土遺物

#### 1. 発掘調査の方法

今回の調査地（第2図）は、当計画実施以前には駐車場として使用されており、あらかじめコンクリートカッターによってアスファルトの切り取りをおこなった。範囲は、新設住宅駐車場予定部分に2箇所である。南辺に沿う南北5.8m×東西5.2mを1区、西辺に沿う南北7.8m×東西6mを2区と呼称する。それぞれの掘削深度は、1区が設計GL-1.35m、2区が設計GL-1.05mである。なお、設計GLは敷地北東隅隣地境界プレート+2cmである。掘削によって排出される残土は、すべて調査地内に仮置きした。調査終了後の埋め戻しは、工事とのかね合いもあり、事前協議により地権者が行うこととなった。

測量の基準杭は、任意に打設し、すべての遺構平面図はこれを使用した（第4図）。基準高は、本市下水道台帳図（平成4年）記載マンホール高T.P.14.79mから水準測量によって求めた。（坂田典彦）



第4図 調査区配置図 1/250

## 2. 調査の経過

調査期間は、まさにさくら満開の季節であり、暖かいというよりむしろ暑いほどの日差しであった。世界情勢では、イラクで日本人3名が人質として武装組織サラヤ・ムジャヒディンに拘束されるという事件が起った。無事解放されることを祈念した。

調査の進行は、1・2区合わせて4回の遺構面精査、土層断面図の作成を行い、4月9日に終了立会を経て、調査を完了した。以下に、その経過の詳細を日誌抄として述べる。

### 調査日誌抄録

4月5日(月) 晴れ

本日より調査開始。石井氏(設計者)、清家氏(新星和不動産)、施工業者1名、坂田囑託(文化財課)立会いのもと調査開始立会を行った。立会では調査範囲、地下埋設管の有無、設計GLの確認、残土置場の確認を行った。立会后、1区からコンクリートカッターによりアスファルトの切断に着手した。機械掘削は2区から行い、本日中に両区ともに、近現代の水田耕土層(GL-70~100cm)まで掘り進めた。調査杭は、アスファルト舗装されているため、ポイントのみの五寸釘で代用した。

調査地平面図(1/100)の作成に取りかかった。

4月6日(火) 晴れ

2区の壁面整形と3層の人力掘削に着手した。3層からは、土師器片(中世か古墳時代かは不明)とサヌカイト片が出土した。3層は、横方向に縞目状の堆積を成し、層厚5mm程度の薄層の累重である。上中位面から切り込む遺構は無く、いわゆる包含層と判断される。4層上面で褐色砂質粘土の埋土をもつ溝状の土坑SK101(後にSD101と改称)を検出した(第1遺構面)。

SK101は、おそらく古墳時代と思われる土師器細片を密に包含する。ほかに、沈線が施された弥生前期の土器片が出土しており、当区周辺に弥生前期の遺構が広がると思われる。明日、遺構面の厳密な時期・性格を究明する。

夕方、第1遺構面の検出状況を写真撮影し、平面図(1/20)を作成した。エレベーションは、明日に持ち越した。

石井氏(設計者)来跡。

4月7日(水) 曇り

1区の壁面整形と攪乱範囲の見極めを行った。西半部に径1.2m前後のヒューム管が埋置されており、調査対象は東半部に絞られることが確認された。3層中位で平面精査したが遺構はなかった。3層は、耕作土を母材とし



第5図 調査開始前の状況(北西から)



第6図 作業風景(北から)

た遺物包含層という認識を深めた。

2区では、第1遺構面のレベル値を測り、SK101（後にSD101）の埋土掘削を開始した。セクションベルトの実測図（1/10）を作成した。

平井秀二氏（若宮町在住の画家、ペンネームDANIEL HIRAI）来跡。

4月8日（木）晴れ

1区の3層掘削に取りかかった。遺物は少ないながらも出土しており、2区同様中世の包含層と判断される。

2区のSK101は、南西隅の攪乱部分まで延長することが確認できた。これをもって溝ととらえ直し、SK101の呼称をSD101に変更する。出土遺物を観察すると新たに弥生前期の土器片が出土しており、遺構所属時期が弥生前期まで遡る可能性がある。午後になって須恵器の完形の甕が2点、甕1点がSD101から出土した。遺構の切り合い関係を精査する必要が出てきた。甕2点はいずれも口縁部を上にして埋置されていた。これらの検出状況から祭祀および墓域の可能性が考えられよう。

石井氏（設計者）、平井秀二氏（画家）、山本徹男氏（市内遺跡ビデオ編集者）、竹村学芸員（文化財課）来跡。

4月9日（金）晴れ

1区、4層上面で遺構検出を行うが、遺構は検出されなかった。北・西壁の分層・写真撮影後、断面実測（1/20）に着手した。

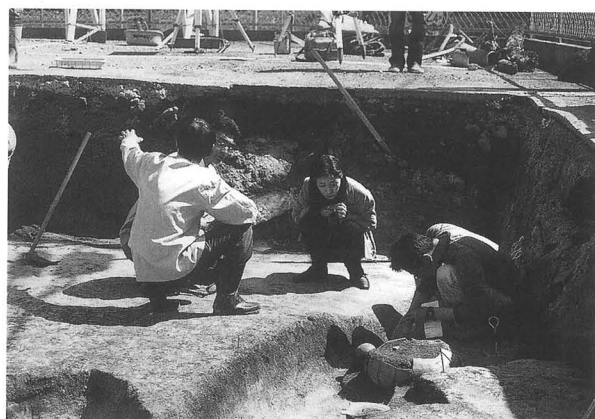
2区SD101の図面修正と須恵器の平面実測（1/10）を行う。SD101と須恵器の年代矛盾を解決するため、地権者の許可を得て須恵器出土地周辺を10～15cm掘り下げた。北側の須恵器は、やや黒っぽい埋土が観察できたため、SK101とした。南側の甕と甕の出土地点は、攪乱の肩と重なるため不鮮明である。

午後1時半より、石井氏（設計者）、代理者（新星和不動産）と、西川課長、森岡主査、坂田囑託（文化財課）で終了立会を行った。調査器材を撤収し調査を終了した（第8図）。

平井秀二氏、山本徹男氏来跡。

調査終了後、持ち帰った遺物の洗浄・マーキング、写真整理、図面整理、遺物実測などの基礎整理作業を平成16年に行い、新年（平成17年）を迎えてからは、報告書の作成に向けて、レイアウト、トレース、遺物撮影、原稿の執筆に着手した。

（坂田）



第7図 完掘状況（北から）



第8図 終了立会風景（北から）



### 3. 1区の見

当調査区では、西半部に大規模な攪乱が入り、事実上は東半部に限られた調査となった。攪乱を除いた調査面積は、9.9m<sup>2</sup>である。敷地内の南端に位置する当区は、現況アスファルト面と、南接する市道上面の比高差が1.8mを測り、南壁土層は数十cmの厚みを隔てて擁壁の盛土であった。遺構の連続性として参考になる既往調査地点は、南接する阪神電鉄の線路をくぐり、縄文時代晩期の自然流路や弥生時代前期新段階～中期初頭の竪穴住居を検出した第1・2地点（改名前、打出小槌遺跡第24地点）がある〔森岡・竹村編1999、本報告第Ⅱ章に詳述〕。調査地周辺の地形は、南へ下る緩傾斜地である。宮川左岸扇状地に立地し、標高は7m前後で、若宮遺跡包蔵地範囲の中では高所部に相当する。現在の平坦面は、中世以降の水田開発に起因するものである。

#### (1) 基本土層（第9図、図版①）

土層番号は、アスファルト・バラス敷布層直下の表土層（盛土・客土を含む）を一括して1層とし、上から順に通し番号を付した。また、同一層と認められるものでも漸次変移しており、土色・土質に微妙な違いがあるもの、異なる複数の層をセット関係でとらえたものは、アルファベットの小文字を付してまとめた。土層断面は、北壁と東壁を実測し、2区との対応関係を掴んだ。

以下に、各層の概要を記述する。

1層：盛土及び客土層。径1mのヒューム管が埋設されていた西半部の攪乱も含めた。

2層：近現代の水田耕土構成層。a～cに分層できた。

2a層 作土。暗緑灰色（5G4/1）礫混じりシルト質細粒砂。2mm以下の礫を中量含む。炭化物チップを若干含む。

2b層 床土。黄灰色（2.5Y6/1）礫混じりシルト質粘土。2～5mm大の礫を少量含む。

2c層 耕盤を造るための置土層。南に下る緩傾斜地をフラットにするために搬入されたブロック土。明黄褐色（2.5Y7/6）礫混じりシルトブロック混じり粗粒砂。3cm大の礫を極少量と、3mm大の礫を中量含む。

3層：中世以降の遺物包含層。a～c層に細分でき、当区ではb・c層を確認した。周辺では、中世段階から宮川の流路固定が始まり、水稻耕作がなされていることから、それらの耕作土が母材となっている堆積層と考える。

3b層 褐灰色（7.5YR5/1）礫混じり中粒～粗粒砂。2mm大の礫を少量含む。炭化物チップが散見される。中世の土師器片が出土した。

3c層 にぶい橙色（7.5YR6/4）シルト質細粒～中粒砂。毛細状の植物根痕が局所的に見られる。3b層に比べ若干細粒である。

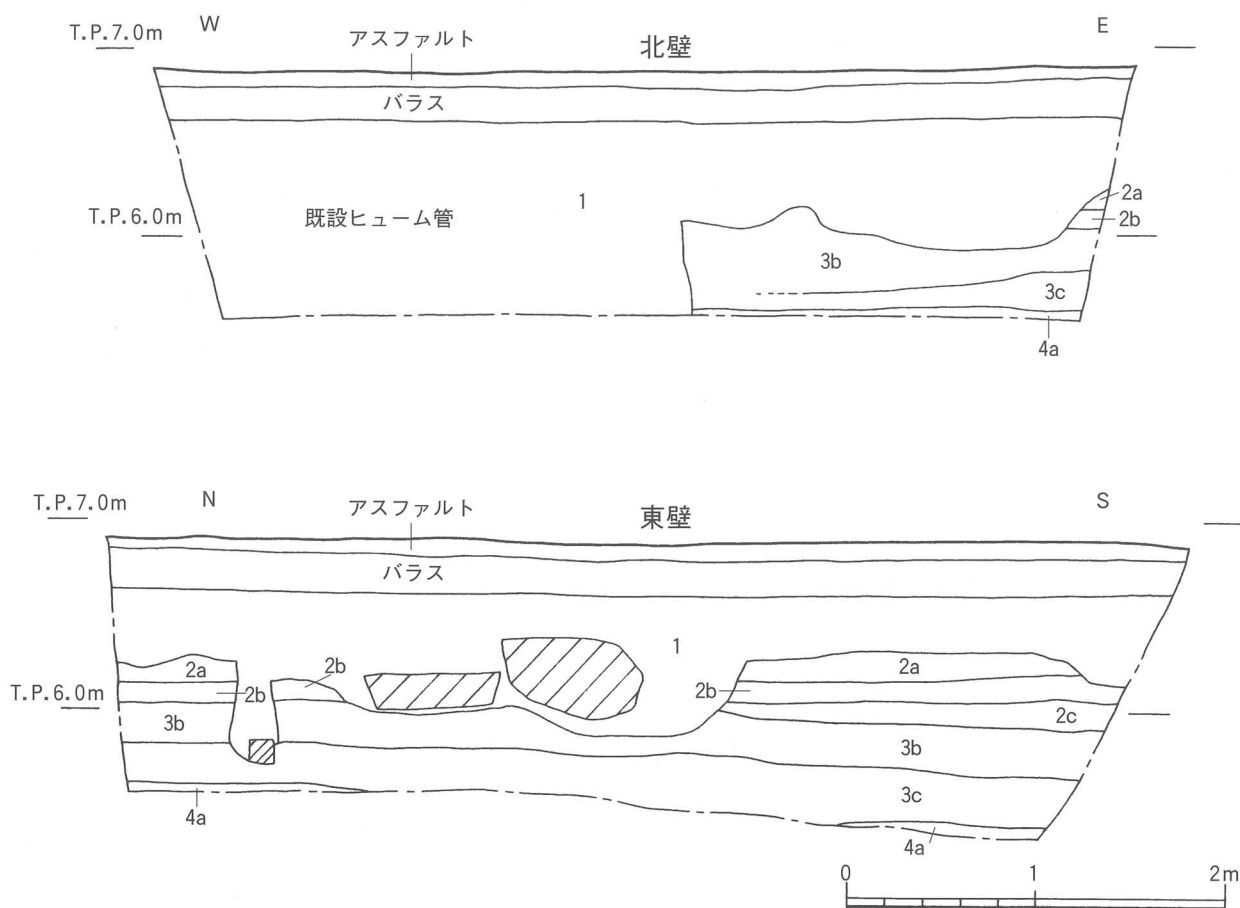
4層：弥生時代の堆積層。2区では、上面が第1遺構面である。当遺跡における弥生時代前期～中期の鍵層であり、第2地点の第7層黒色砂混じりシルト・第8層暗青灰色シルト混じり粗粒砂に相当する。これら鍵層出土遺物の年代観も、本調査で出土したヘラ描沈線文を有する土器片（第15図6～8）が指標となる弥生時代前期新相段階を包摂する。

4a層 明黄褐色（2.5Y7/6）礫混じりシルト質細粒～中粒砂。

4b層 褐灰色（10YR6/1）シルト質粗粒砂。やや粘性を帯び、鉄分沈着が著しい。

#### (2) 検出遺構

遺構は検出されなかった。遺構検出作業は、3c層上面と最終掘削床である4a層上面の2面で



第9図 1区 土層断面図 1/40

行った。2区で検出した第1遺構面を乗せる4層が、当区では自然地形に則して20cm～40cm低いレベルで検出され、掘削深度の兼ね合いから上面をかすめる程度であったことが要因である。いわんや当区下層に遺構が無いわけではなく、より下層に掘削が及ぶ場合には、2区同様遺構面が広がることが当然予測される。

### (3) 出土遺物 (第10図、図版③)

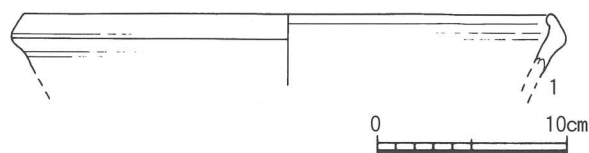
1区では、3・4層から26リットルコンテナにして1/6箱分の遺物が出土した。種類は、弥生土器・須恵器・土師器・埴輪・サヌカイト剥片などである。実測数が僅少であるため、層位ごとに遺物の出土傾向を概観する。

#### 3層出土遺物

中世須恵器では埴や捏鉢が、土師質土器では羽釜・埴の脚柱部が出土した。これらの遺物が下限年代であり、13～14世紀中頃所産の遺物が主体である。層相から混入遺物と判断するが、古墳時代初頭のハケ調整を施した甕の細片や、胎土・色調から弥生土器と推測できる遺物が出土した。石器類には、サヌカイト剥片が2、3点みられる。

#### 4層出土遺物

弥生土器・須恵器・埴輪・サヌカイト剥片が出土した。前節で述べたように、当地区では4層上面を局所的に検出したにとどまるため、遺物取り上げ時の混在も考慮して、遺物



第10図 1区 出土遺物実測図 1/4

の年代観を4層の時期設定に利用できないことを明記しておきたい。弥生土器は細片のため、色調・胎土から推測したもので器種などは不明である。須恵器細片は、多くが甕の体部と推測される。埴輪片にはぶい橙色を呈し、石英・長石・赤色砂粒が目立つ。器面の調整および整形は、外面にハケ（8本以上／1cm）を、内面に粗いヘラケズリを施す。7cm×6cm四方大の破片であるが、円弧状の湾曲が看取できないことから、円筒埴輪ではなく、形象埴輪の一部と思われる。

1は、中世須恵器の捏鉢である。口縁部のみ残存しており、復元口径は28cmを測る。口縁端部は肥厚し、断面三角形を呈する。内外面とも灰色～灰白色を呈し、胎土は0.5mm以下の長石粒を多く含み、粒度は並である。器面調整は外面に回転ナデを、内面には口縁端部直下に肥厚部分の粘土接合痕がわずかに観察できる。いわゆる東播系須恵器と呼ばれ、13世紀中頃以降の所産である。

（坂田）

#### 4. 2区の所見

次に2区の発掘所見について記述する。

当調査区では、北西隅から中央にかけて比較的広範囲な面積で調査をすることができた。敷地全体から眺めて西端に位置し、現況アスファルト面と、西接する市道上面の比高差は60～80cmを測る。このことから、1区に比べ中世遺物包含層の過半は遺存していることが予測できた。したがって、機械掘削は近現代耕土層を除去することを目標とし、島状に残っている3層を確認した時点で人力掘削に切りかえ、遺物の取り上げと、遺構検出に努めた。その結果、時間的断絶がありながらも弥生時代前期から中世中頃までの遺構面・遺物包含層を確認した。第1・2地点で確認されている縄文晩期の堆積層は、掘削深度以下に広がっているものと考えられる。

##### （1）基本土層（第11図、図版②）

層名は1区と対応しており、新たに確認した堆積層においても、枝番を増やす範囲に留まった。以下に、各層の概要を記述する。

1層：盛土及び客土層。既設の擁壁掘形や、西接する市道造成時に削平されたとされる攪乱も含め、1層とした。

2層：近現代の水田耕土構成層。a～cに分層できた。置土（2c層）は観察されず、耕盤を作る際、当区で削平した土を1区の低所部に供給したと判断する。

2a層 作土。暗緑灰色（5G4/1）細礫混じりシルト質細粒砂。2mm以下の礫を中量含む。炭化物チップを若干含む。

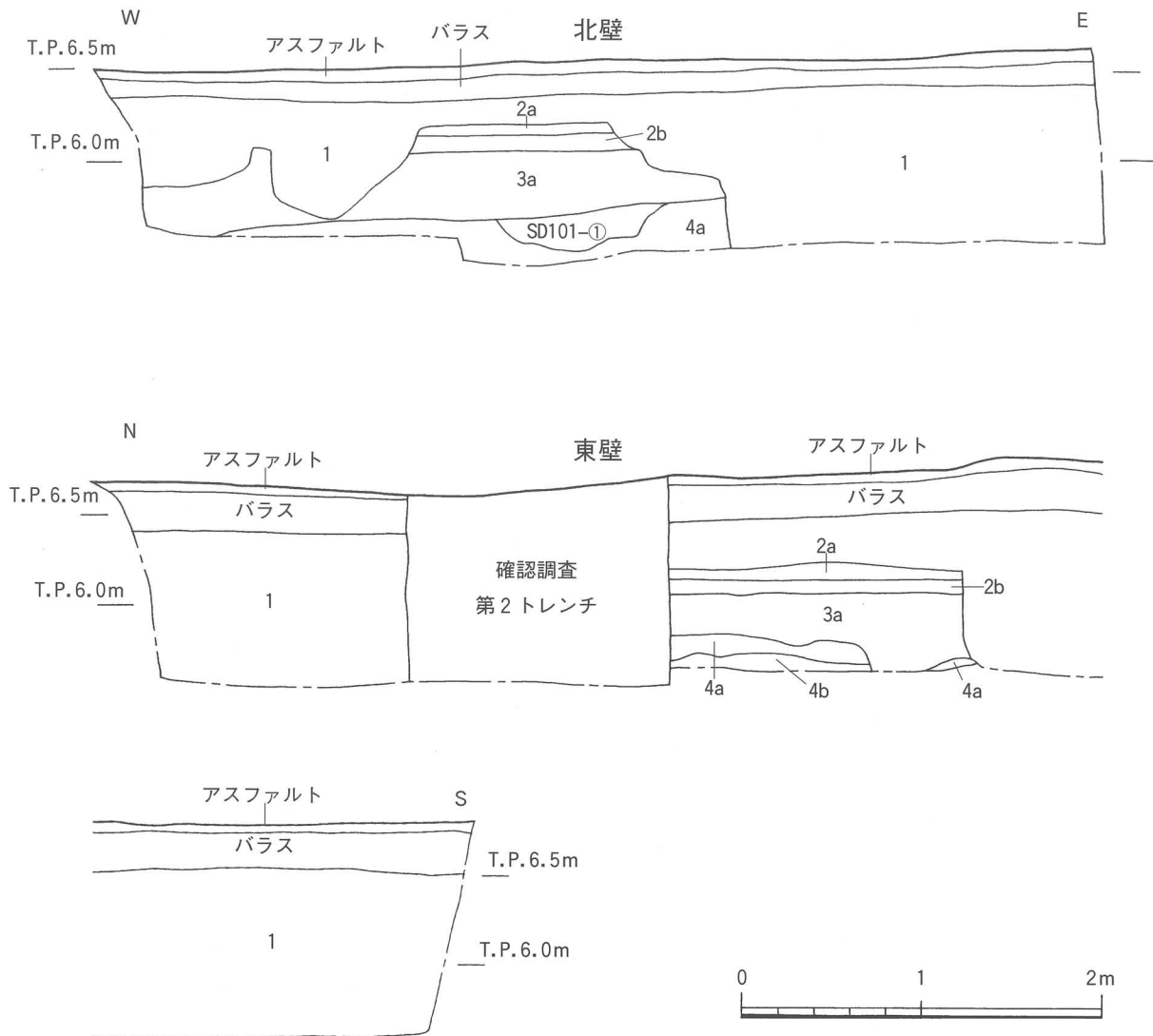
2b層 床土。黄灰色（2.5Y6/1）礫混じりシルト質粘土。2～5mm大の礫を少量含む。

3層：中世以降の遺物包含層。a～c層に細分でき、当区ではa層を確認した。周辺では、中世段階から宮川の流路固定が始まり、水稻耕作がなされていることから、それらの耕作土が母材となっている堆積層と考える。

3a層 灰色（5Y6/1）中礫混じり中粒～粗粒砂。3mm以下の礫を中量と、3cm大の礫を少量含む。詳細に観察すると、断面では、層厚5mm程度の薄層の累重が見られる。鉄分沈着が看取できる。

4層：弥生時代の堆積層。上面が第1遺構面である。当遺構面では、古墳時代の土坑と、弥生時代の溝を検出した。掘削深度の関係により当層中位までしか掘削しておらず、層相全容の把握に至っていないが、上位に弥生時代後期の甕や、古墳時代の須恵器が散見されること





第11図 2区 土層断面図 1/40

から、該期の堆積層が狭在した後に、中世期の水田開発時に減層した公算が高い。

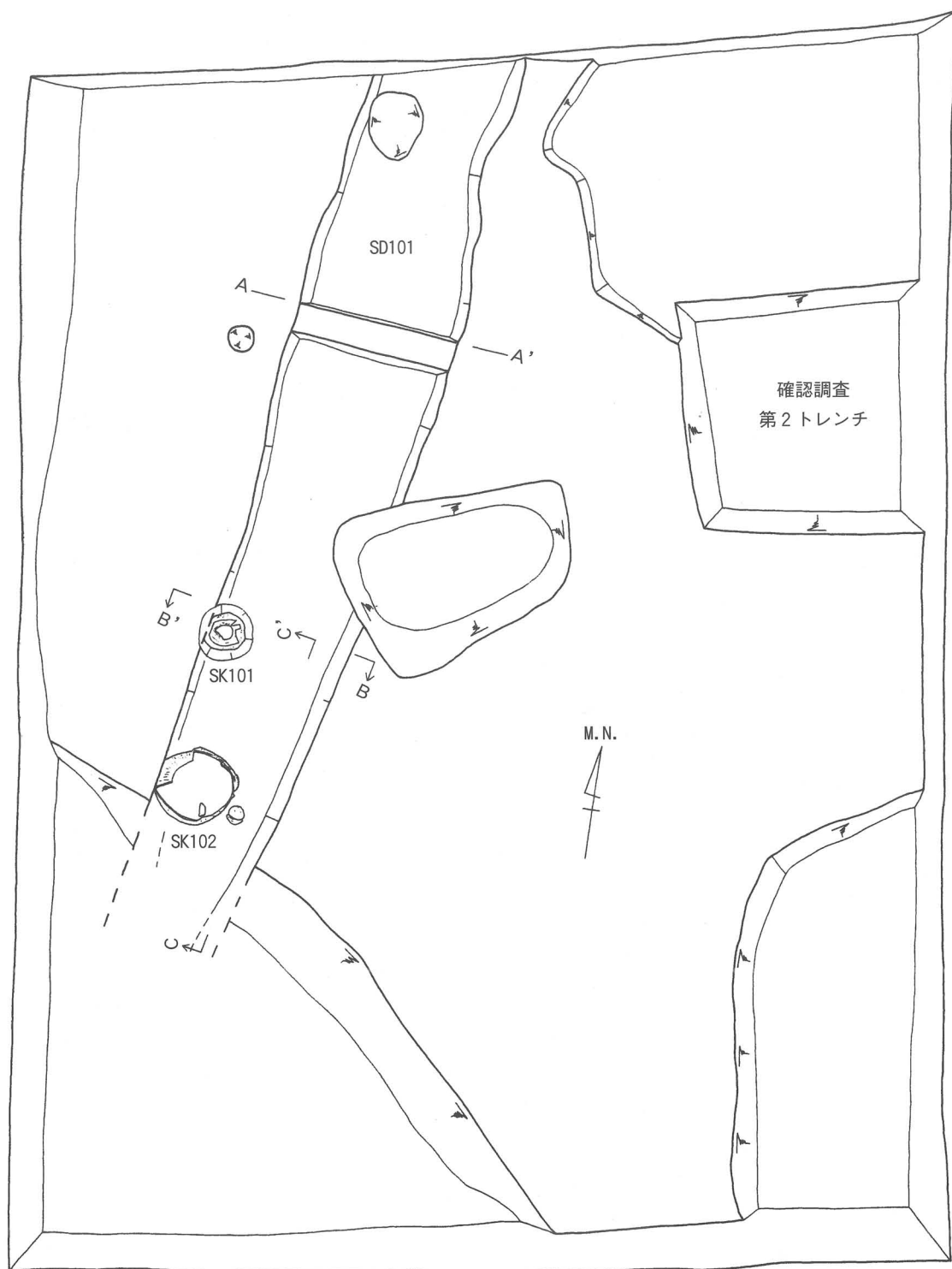
4a層 明黄褐色(2.5Y 7/6)礫混じりシルト質細粒～中粒砂。上面は、3層によって削平を受けているものと思われる。

4b層 褐灰色(10YR 6/1)シルト質粗粒砂。やや粘性を帯び、鉄分の沈着が著しい。本調査区の東域でのみ観察できた。

## (2) 検出遺構

遺構検出は、3a層中位と4a層上面の2面でおこなった。それぞれの精査面のレベルは、T.P. 5.9～6.0mと、T.P. 5.6～5.8mである。3a層中位での遺構検出は、土層断面に反映されない遺構を想定して精査したが、遺構は検出されず、その結果、3層は遺構を伴わない中世段階の遺物包含層と認識するに至った。

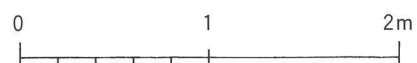
4a層上面では、古墳時代の土坑(SK101・SK102)と弥生時代前期の溝(SD101)を検出した。当初、SD101は完形須恵器の帰属する古墳時代の溝と判断していたが、切り合い関係や、溝の埋土から出土する遺物やセクションベルトの観察から、同一面上で検出した2時期に弁別できる遺構であると判断した。以下、4a層上面を第1遺構面と呼称し、詳述する。



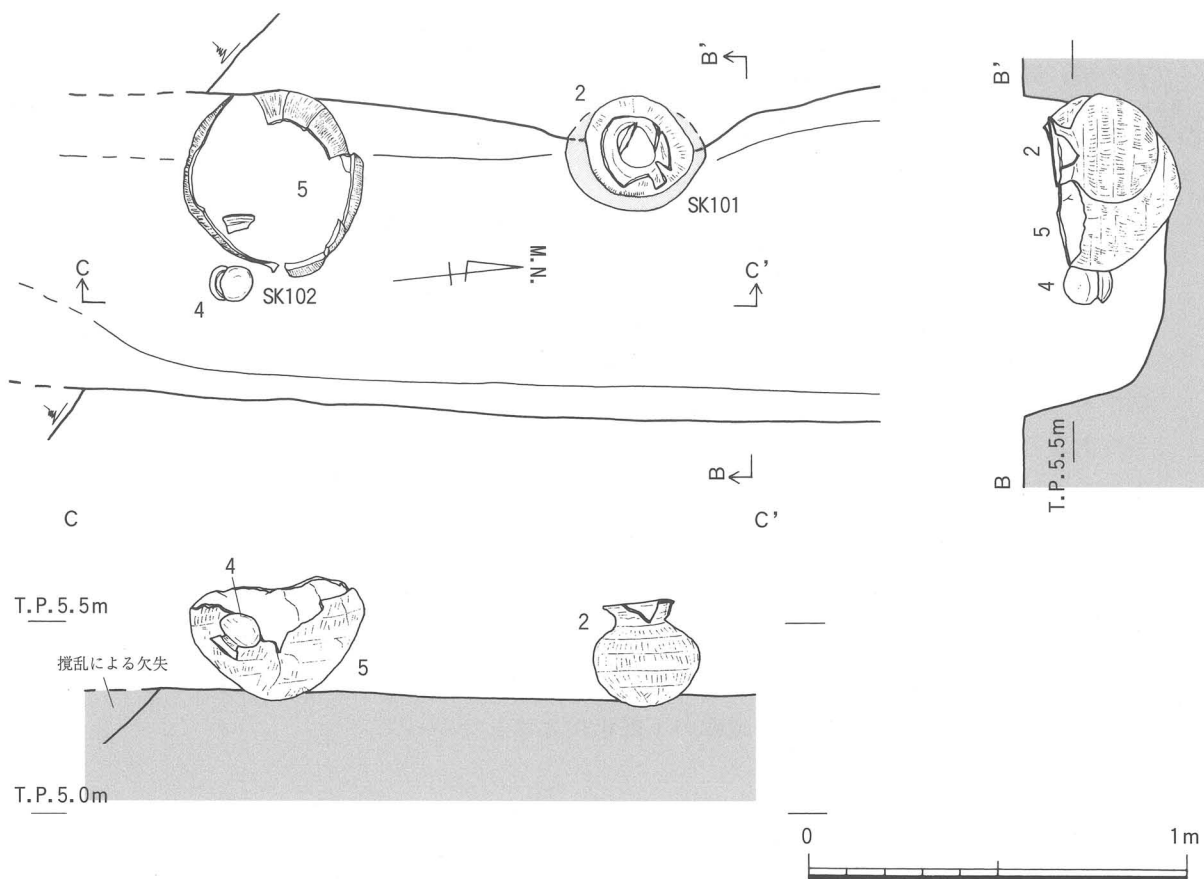
P 2  
+



黒褐色 (10YR3/1) 礫混じり砂質シルト。2 mm 大の白色・赤色粒を  
中量含む。微細な炭化物チップを少量含む。鉄分沈着著しい。



第12図 2区 第1遺構面平面図 1/40



第13図 2区 SK101・102 平面・立面図 1/20

## 第1遺構面（第12・13図、図版②、巻頭写真Ⅰ・Ⅱ）

### ①古墳時代の遺構

ベースとなる4a層は、褐色系の色調を呈し、シルト質中粒砂を特徴とする安定した土質である。後世に上面を削平されていることが窺われ、土層断面では当層の高低差は失われている。1区や第1・2地点との比較によると、南に向かって緩やかに下ることが推測される。

古墳時代の遺構は、完形の甕1点（第14図2）を包含するSK101と、1m程離れて2よりやや大きめの甕1点（同図5）・甕1点（同図4）がセットになって同出するSK102がある。SK101は、SD101の掘形を切り込む状態で出土し、40cm四方の掘形内に完全にはまり込むように、口縁部を真上に向けて埋置されていた。甕の体部最大径が29cmであることから、土坑掘形と甕の隙間は僅か数cmの余裕しかなく、この甕を埋置するために掘り込まれたことがわかった。埋土は、黒褐色礫混じりシルト質細粒～中粒砂で、ベース層（4a層）と比較すると、やや粘性を有し、黒ずんだ印象を受ける。取り上げ時は、SD101の最下層出土としたが、陶器TK47段階前後の須恵器坏身片（同図3）は、当遺構埋土から出土したものと判断した。甕の器体内部の土を入れたまま持ち帰り、詳細に観察したが、流入土が埋積しているのみで、特別視する遺物や動植物の遺体片などは全く検出されなかった。

次に、甕（同図5）と甕（同図4）が伴出した遺構であるが、甕の肩部～口縁部を破碎しながら掘削深度以下に至る攪乱とその汚染により精査を繰り返したが、平面的な遺構の輪郭は不明瞭であった。一応、二つの遺物を含める範囲をSK102とした。遺存部分の検出状況から、SK101と同様に口縁部を真上に向けて埋置されていたことが確認でき、原位置を保っているものとみなされる。埋置床のレベルは、両土坑ともほぼ同レベルである。ただし、甕は、原位置を保っている



か否かの検証ができなかった。検出時は、南斜め下方に口縁部を向けて転倒した状況で出土した。甕と甗に関しても、土器内の陥入土(堆積土)を入念に観察したが、遺物は検出されなかった。

## ②弥生時代の遺構

溝1条を検出した。主軸は、磁北から10° 20′ 東偏している。幅は0.9～1 mを保ったまま直線的に開削されている。検出時は南西隅の攪乱の手前で閉塞しているように見えたため、細長い土坑として扱ったが、埋土を掘削する段階でその延長を認め、溝となることが判明した。断面形は皿形を呈し、深さは北半域で10～20cm、南半域では30cmを測る。先にも記したが、当遺構面は削平を受けたものと思われ、南に下る程、遺存率が高く、これらの数値はあくまでも残存部の深さであると判断する。溝底面はやや凹凸を成す箇所と、セクションベルト断面実測箇所のように平坦面を呈する箇所がみられる。底面レベルの比高差は無く、ほぼフラットである。

埋土は、黒褐色礫混じり砂質シルトの単一層である。最下層にシルトの溜まりが局所的に見られるが、常時、流水形跡がみられ、導排水路として機能していた遺構ではないと推測している。埋土からは、主として弥生時代前期のヘラ描沈線文を施した土器細片が出土している。弥生時代後期のタタキを施した甕(第15図10～12)も僅かに出土しているが、「(1) 基本土層」で記した事由により混入遺物と判断し、当遺構の下限年代とはしなかった。

## (3) 出土遺物(第14・15図、図版③・④)

2区では、3・4層から26リットルコンテナにして1/3箱分の土器破片遺物と、完形甕2点・完形甗1点が出土した。種類は、弥生土器・須恵器・土師器・埴輪・サヌカイト剥片などである。始めに層位ごとの出土傾向を概観し、実測遺物について詳述していく。

### 3層出土遺物

中世の瓦器埴底部片、須恵器の甕体部片、サヌカイト・チャート剥片、白磁片、土師器片、弥生土器片が出土した。瓦器埴は、炭素の吸着が悪く、色調は灰黄色を呈する。高台は断面逆台形を呈する。胎土は、きめ細かい厳選された生地を使用し、焼成は良好である。サヌカイトは、4 cm大の未調整剥片である。

### 第1遺構面(4層上面)出土遺物

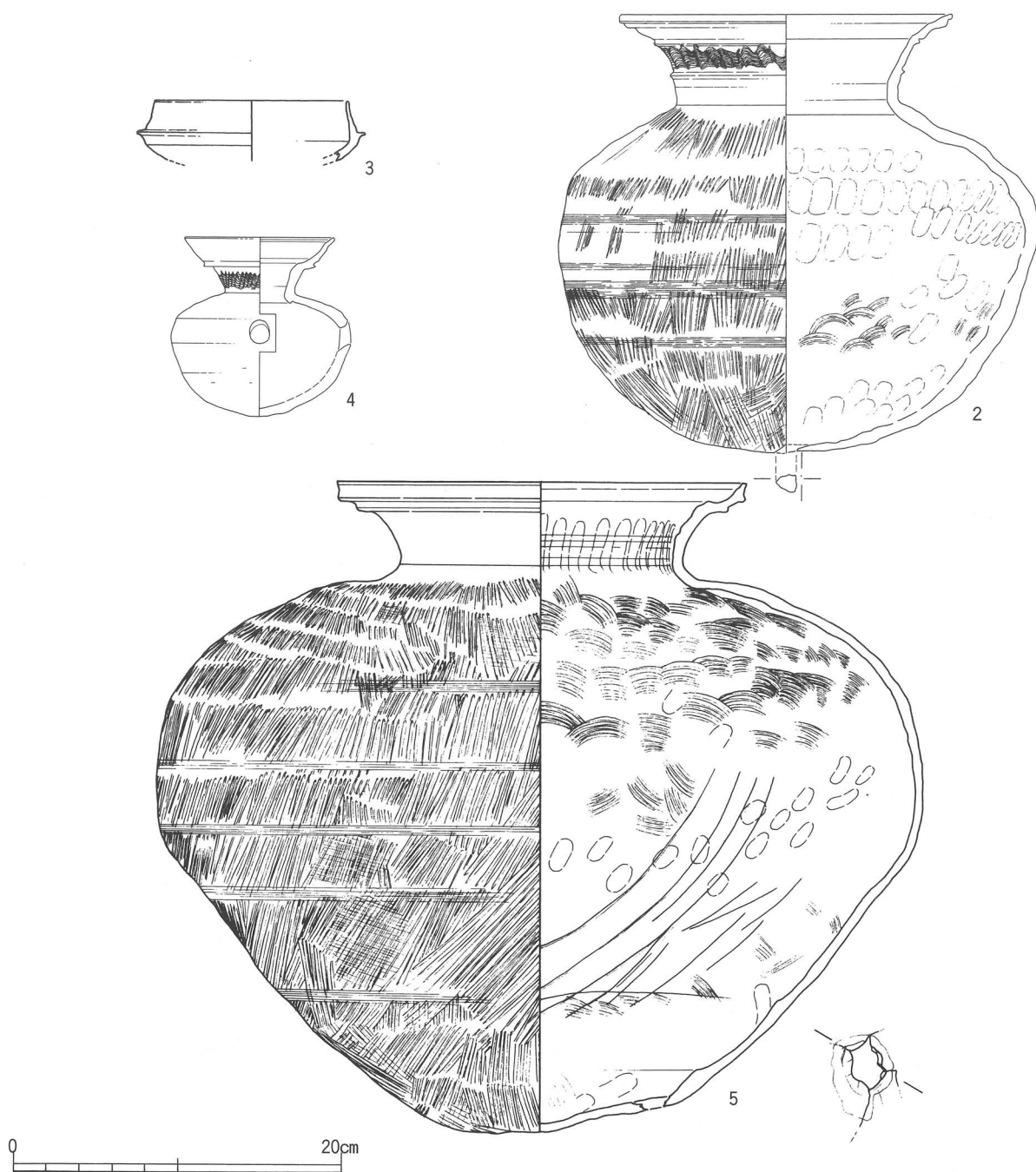
主として弥生土器の胎土を持つ細片を10数片と、サヌカイト剥片が4点出土した。弥生土器は、ローリングが著しく、器種・器形が復元できるものはなかった。サヌカイトは、一次加工の際に生じた鋭利な刃部を利用したとも思われるが、押圧剥離などの刃部調整の行われているものや、製品は出土しなかった。肉眼観察では、4点すべてが二上山産と思われる。第2地点でも剥片が126点出土しており〔福島・上垣・藤井1999〕、当地点を含めた若宮遺跡内でのサヌカイト製石器の加工・流通の一端がうかがえる。

### SK101出土遺物

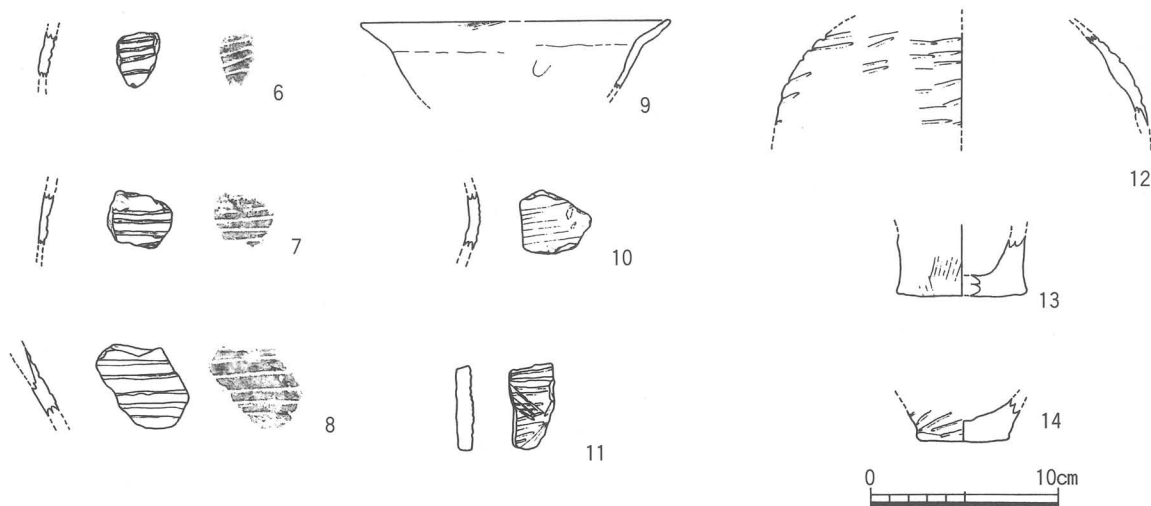
2は、須恵器甕の完形品である。土圧によって口縁部が破損していたものの、整理段階で100%に接合できた。主要な部位の法量は、口径19.7～20.5cm、体部最大径29cm、器高27cmを測る。色調は、灰色を呈し、肩部上位から口縁部内面に自然釉の付着が観察できる。体部最大径が肩部との変換点にあり、均整のとれた美しいフォルムである。外面調整および文様構成は、口縁端部から口頸部間に断面三角形を呈する明瞭な稜を2条巡らせ、稜間にややピッチの乱れた波状文を施している。底部から肩部にかけては、同原体の細かな平行タタキを反時計回りに施し、最終的に回転ナデ・カキメによって仕上げられている。底面には、焼成時に敷かれていた藁紐の焼きムラが残っている。

内面調整は、同心円文あて具やユビオサエ（接地面が長楕円形の当て具の可能性もある）の痕跡が見られるが、部分的にナデ消しの意図が看取できる箇所がある。特筆すべきこととして、焼成後に外底面から打ち欠きを与え、1 cm程の穿孔が見られる。この行為は、墓域ないし祭祀を具象するものとして、往時の精神世界の観点から積極的に評価すべき特徴と考える。

3は、須恵器坏身ないし有蓋高坏の坏部である。色調は灰白色を呈し、白っぽい印象を受ける。立ちあがりには内傾し、端部は細身をなしつつ丸くおさめる。外面ヘラケズリは、体部上位まで観察できる。受け部から底部へのカーブは、やや平たく移行すると思われ、器高指数・調整・形態から陶邑TK23～TK47段階に比定される。



第14図 2区 出土遺物実測図 1 / 4



第15図 2区 出土遺物実測図 1 / 4

#### SK 102出土遺物

4は、須恵器甕の完形品である。口頸部は短小で、口径より体部最大径が上回る段階のものである。口頸部の稜は明瞭で、シャープなつくりである。体部に径1.2cmの焼成前穿孔が穿たれる。外面調整は、底部から体部上位に反時計回りの手持ちヘラケズリが施され、その後、砂粒の動きが見えない程度にまでナデによって器面を仕上げている。頸部には、均一で繊細な波状文が施される。口縁部内面有段部に緑黒色の自然釉が付着する。TK23段階に比定される。

5は、須恵器甕である。攪乱により肩部から口頸部にかけて破損していたが、攪乱部からの破片採集によって、ほぼ完形に復元することができた。青灰色を呈し、胎土は緻密である。外面調整は、底部から体部にかけて密な平行タタキが施され、一部ではタタキ原体の溝に直交する木目が反転され格子状に見える箇所が存在する。内面調整は、外面の平行タタキに対応し、同心円や楕円状の当具痕、ユビ圧痕が観察できる。また、最終調整として、内底面から体部上位まで一気にナデ上げた痕跡が部分的に見られる。当土器にも、2と同様に焼成後の底部穿孔が行われている。

#### SD 101出土遺物

6～8は、弥生時代前期の甕・広口壺である。残存率が低く傾きは推定であるが、6・7は如意形を呈する甕、8は広口壺になろう。いずれも、外面に4条以上のヘラ描沈線が施され、沈線の多条化が看取できる。弥生時代前期後半の時期とみられる。

9は、弥生時代前期から中期に比定される鉢の口縁部である。碗状の体部に大きく外反する口縁部をもつ。口縁部外面に横方向のハケが僅かに観察できるが、丁寧なヨコナデによって消されている。胎土は粗く、1～2mm大の砂粒を含む。

10～12は、弥生時代後期の甕体部である。10は、橙色から褐色を呈し、胎土は0.5mm以下の白色砂粒を若干含む。調整は、外面にタタキを、内面に横方向のナデを施す。11は、橙色を呈する甕体部片である。タタキの原体幅は12より密である。器壁は8mmを測り、胎土に1mm以下の石英・長石粒を多く含む。12は、にぶい橙色を呈し、胎土に微細な白色砂粒を含む。外面調整は、タタキを施す。13は、弥生時代前期末～中期初頭の甕か鉢の底部であろう。底面はやや上げ底ぎみになる。橙色を呈し、胎土は粗く、2mm大の長石・石英を多く含む。外面は、タテ方向のハケメ（7本/1.4cm）の後、ナデ仕上げとする。外底面は、ハケないし板状工具によってケズリを加える。14は、弥生時代後期から庄内併行期の甕の底部である。底部接地面まで右上がりのタタキが施される。内底面には、板状工具による螺旋状のナデが観察できる。（坂田）



## IV. 調査のまとめ

### 1. 本地点の性格をめぐって

今回の調査では、2区の第1遺構面（4a層上面）にて古墳時代中期の遺構と、弥生時代前期の溝を検出した。確認調査から得られたデータと、周辺の既往調査の認識から予察すると、本地点の様相は、縄文時代晩期から弥生時代前期の遺構面ないし遺物包含層と、中世期の耕作痕の検出に終始すると推測されたが、弥生時代の遺構面と同一面で、完形の須恵器3点を埋置する土坑を検出した。点的に存在する遺構の性格、またその地点発掘の重要性を改めて認識するに至った調査であった。

本節では、所見と重複する部分もあろうが、若干の推察を含め、調査成果を簡潔に列挙することでまとめとしたい。

#### （1）中世遺物包含層とその成因

中世段階の若宮遺跡の動態は、耕地化が急速に進行する時期と言えるだろう。これは、当遺跡のみならず、翠ヶ丘丘陵上では打出岸造り遺跡（第9地点など）・久保遺跡（第15地点）で、芦屋川流域では津知遺跡・六条遺跡・清水遺跡において、立地条件による時期差はあるものの同様の動きがみられる。これまでに、古代末から中世段階の耕作地の広がりについては、考古学的・歴史的・地質学的な背景から幾度となく検討されており〔佐藤1999、辻2002、辻・森岡・竹村2001、森岡2002a、竹村2003など〕、かいつまんで記述すると、以下のとおりである。

まず、古代において、天平15年（743）墾田永世私財法の発令を受けて、市域周辺（菟原郡）では天平19年（747）には法隆寺領の墾田があったとされる。その後、10世紀後半になると藤原氏の摂関政治が盛栄を極め、寺社の墾田から摂関家の荘園として姿を変えていった〔芦屋市役所1971〕。この頃以降、耕地に適した場所から水田経営が加速し、中世段階には可耕地を求めて、比較的高所部の扇状地頂部（芦屋廃寺遺跡第79地点・三条岡山遺跡第1地点など）や、宮川・芦屋川の流路固定（若宮遺跡第34地点・津知遺跡第28地点・六条遺跡第18地点）と連動するかのようになり、河川間際まで水田遺構が検出されており、幾度となく田面を洪水砂がバックする状況が見てとれる。

このような背景をふまえ、第3層の中世遺物包含層を解釈していきたい。まず、3層は灰色～褐灰色を呈する中礫混じり中粒～粗粒砂から成り、宮川の氾濫によって供給された砂礫が母材となっている。また、層厚5mm程度の薄層の累重が見られること、微細な炭化物片や、弥生時代の遺物が混入していることから考えて、氾濫堆積物と弥生時代から古墳時代の堆積層を削平・混層しながら、耕作土を形成していったものと推測する。このように、客土と該期の堆積層を混層しながら耕作地を形成していく例は多く、市内では津知遺跡でも同様の考えが指摘されている〔竹村2003〕。

今回、犁溝・畦など耕作関連遺構を検出しなかったため、耕作土とせず「遺物包含層」と称した。しかし、直上に近世以降の耕作土が乗っていることから、中世の耕作遺構を攪拌・踏襲していることも充分考えられ、土壌学的には耕作土および耕作地の扱いがなされる層相である。今後、古代末から中世期の生産体制や農業史的考察をおこなう折には、追加されるべき地点であろう。

#### （2）完形須恵器の検出と遺構の意味付け

今回検出したSK101とSK102の甕は、いずれも口縁部を真上に向けて埋置されていた。なおかつ、焼成後の底部穿孔が見られる点で共通した検出状況を示している。遺構の帰属年代は、遺物の編年

的位置づけから、SK101出土の坏身ないし有蓋高坏がTK23～TK47段階、SK102出土の甕がTK208～TK23段階に比定され、打出小槌古墳の帰属する古墳時代中期末（5世紀末）と相応する。

調査の範囲や条件によって左右されるため、今回の検出状況が局所的・点的な遺構配置とは一概には言えないが、完形の土器が何らかの意図に基づいて、単独で埋置される例は、縄文時代以降見られるものであり、一般的には「墓」に伴う葬送儀礼や祭祀の痕跡として捉えられることが多い。先学の研究では、時期は別として、底部穿孔無文土器を甕と甕棺の両方の可能性から言及する例〔白井1997〕や、廃棄行為から該期の社会・文化システムを考察する試み〔小林1991、藤田1986、若林1994〕が行われている。考古学では、思想・精神世界などモノとして残らない行為は不得手であるが、その行為の痕跡から言及するならば、冒頭に記した①直立埋置と、②底部穿孔は思惟思想の現れと受け取ることができるだろう。①の直立埋置は、口縁を上に向けていることから甕本来の使用目的と合致しており、物理的・思想的な（非物理的な意識など）モノを「入れる」「溜める」「受ける」「封じる」行為が感じられる。②の底部穿孔は、焼成後穿孔であり、また第14図5などは体部と底部の変換部に穿たれており、甕などの機能的穿孔とはかなり異なる。むしろ甕本来の機能を破壊・破棄することを目的とする儀礼的行為と受け止めることができよう。

ここで整理してみると、②の破壊行為と土器陷入土に人為的遺物や動植物遺体が検出されなかったことから、消極的ながら①の「物理的なモノ」を入れる行為は消去できる。次に、直立埋置と左記の「非物理的なモノを入れる入れ物」という結論、そして形象埴輪片の出土、近傍に所在する打出小槌古墳・金津山古墳の存在から、希望的観測ではあるが、この行為痕跡を認知考古学で言う心的表象と捉え、供献土器の意味も含めて墓域に伴う祭祀遺構と推測する。

### （3）宮川左岸における弥生時代前期集落の広がり

市内において、弥生時代前期の段階に活動が見られる遺跡は、当遺跡を含め、清水遺跡、津知遺跡、寺田遺跡、業平遺跡、前田遺跡などがある。いずれも、芦屋川・宮川の開析および運搬作用によって形成された扇状地から扇状地間低地に立地し、該期の推定汀線からおおよそ1kmの範囲に収まる。

当遺跡は、Ⅱ.1. 既往調査の概要で記したとおり、滋賀里Ⅲb式期以降の占住が確認されている。定住を意味する竪穴住居の検出は、弥生時代前期から中期初頭にかけて類例を増し（第2・4地点）、やがて中期中葉から後期前半の断絶期を迎えることとなる。

市内における弥生時代前期遺跡の分布は、以前にもミクロ・マクロ的な視点で考察されており〔森岡・竹村1999、森岡編2004〕、その論考に委ねることとして、若宮遺跡単体で概観すると、今回の調査地点は若宮遺跡北限に相当し、既往調査においてもこれまで面的な調査が行われていなかったエリアである。阪神電鉄以北における弥生時代前期遺構の検出は、該期の集落範囲を北に50m拡張することとなり、現在の若宮遺跡包蔵地範囲の北限まで分布することが確認できた。（坂田）

## 2. 出土須恵器についての二、三の考証

本節では、当該調査地点において特異な出土状態を示した一群の須恵器について、報告の記載を踏まえつつ若干の考察を加える（巻頭写真Ⅰ・Ⅱ、第12～14・16図、図版②～④、表紙・裏表紙参照）。

須恵器は2群に分かれて出土した。調査区は狭小であり、その存在形態を他の遺構との関連で説明することができない困難さを伴う。報告したことを再度整理し直すと、次のようになるであろう。

①須恵器は原則として完形品で出土し、2つの位置で検出された。

②2群の須恵器は、それぞれ土坑からの出土状態と認識した。

③土坑はそれぞれSK101、SK102と呼称し、4a層上面でその遺存を確認した。

④土坑SK101には完形の須恵器小型甕1点（第14図2）が、土坑SK102からは須恵器中型甕1点（第14図5）と甕1点（第14図4）が伴出した。

⑤土坑SK101の掘形は径約40cm、土坑SK102の掘形は輪郭不明瞭であるが、径約70cmを計測する。前者の埋土中からは須恵器杯身片（第14図3）が出土した。

⑥検出された須恵器の器体内の充填物を精査したが、視認できる内容物は全くみられなかった。

⑦SK101・102出土の大小の甕には、器種以外に焼成後の底部穿孔という共通点（仮器化の意図）が認められるとともに、埋置姿勢が口縁部を真上にして直立している点も同じである。

⑧土坑SK101とSK102は近接しており、直線距離にして1m前後を測る。

⑨土坑SK101とSK102の出土須恵器は、埋土中の破片資料を除き、共に原位置を保つものと判断される。人為的に据え置かれたものと考えている。

以上の事実の点検とは別に、完形の須恵器が原位置状態で出土した場合の機能や性格を付与した考古学的解釈の類別は以下のごとくだろう。

A. 古墳副葬土器 B. 古墳供献土器 C. 棺転用土器 D. 住居内日常土器 E. 祭祀埋納土器。

順次、検討を加えると、①からはAの可能性も指摘できるが、②以下の所見は①を積極的に支持するものではない。これに反し、Bは①～⑨のいずれとも調和し、若宮遺跡でこれまで5世紀後半～末の埴輪や葺石が確認されている事実を尊重すれば、蓋然性が高い考え方と言えよう。Cは①～④・⑧・⑨と抵触せず、⑥についても大きな問題はない。⑦については、土器棺の機能を否定するものではないが、埋置法や底部穿孔など類例の検討が不可欠である。Dについては、建物内とする積極的な証左は見当たらない。竪穴住居や掘立柱建物との関係については、消極的にならざるを得ない。そして、①～⑨のすべてにおいて関連性を否定できないものとして、Eは有力視できるだろう。

これらの点において、実例を踏まえた分析が必要となるが、地域を大きく広げて考証を加える余裕はないので、近傍の事例のうち、時期が近接した、とくに須恵器甕を用いた事例の二、三を取り上げるとともに、検出状態を復元できる市内出土の須恵器の甕などを統一縮尺の実測図として再掲し、その性格づけに供する資料としたい。

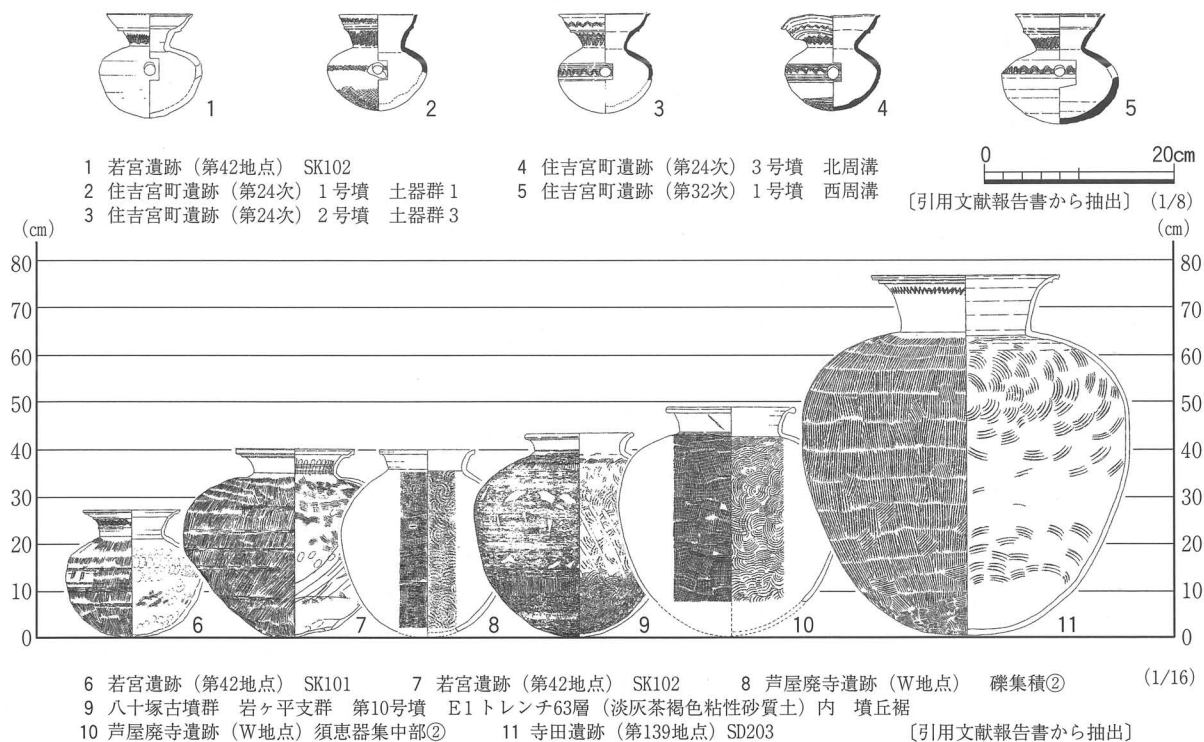
第16図上段は、若宮遺跡の本地点出土の須恵器甕と同様に主として5世紀代の小型甕の類品を近隣の神戸市住吉宮町遺跡に求めてみた〔安田編2001〕。若宮遺跡の範囲では、記述してきたように、散発的に葺石や埴輪片が出土するケースが認められ、平野部に展開する同様な方墳群の存在が予測されるからである。第16図2は1号墳土器群1で、「隅石付近の周溝底に置かれていた供献土器群」のうちの1点である。共伴した杯類や無蓋高杯を含め、田辺昭三編年のTK208型式に帰属する。3は、2号墳西周溝底で検出された供献品群（土器群3）で、人頭大以下の小さな石組の下に存在した須恵器6個中の1点で、鉄製鋤・鍬先が共伴した。「これらの須恵器はTK23型式からTK47型式に属する」幅がみられる。4は、3号墳北周溝出土の甕で、土師器の丸底甕とともに出土した。TK23型式古相期の所産と考えられる。5は1号墳西周溝の一群の土器中の1点で、樽形甕や滑石製紡錘車など、特徴的な遺物を伴い、加えて堅緻な焼成の須恵器類が細かく破碎されていた。須恵器の年代はTK208型式を前後するものであろう。これらの例からみれば、この地域に多い方墳、墳丘や周溝における土器祭祀と相通ずるところがあるが、本例は古墳の周溝を裏づける証左には恵まれず、疑問も多い。なお、こうした事例をいくつかみてみると、供献土器グループに配置された複数個体の須恵器や土師器の組成中に1点の甕が加わるケースが目立っており、須恵器の杯・高杯など供膳具類とセットをなし供献される共通性が指摘されている。微証かもしれないが、本例でも杯身の小破片が出土しており（第14図3）、土器群全体の埋納時期や組み合わせを考える上にヒントを与えている。

次に市内出土事例のうち、須恵器の大形・中形甕が特徴的な検出状態を示したものを取り上げると（第16図下段）、寺田遺跡（第139地点）溝SD203で検出された完形品に近い市域最大クラスの大甕がまず注目される（第16図11）〔前田ほか2002〕。溝は長さ18.0m、最大幅2.0m、深さ0.3～0.5mの規模で、甕は口径39.0cm、器高79.5cmを計測し、古墳時代中期後半の多量の遺物と共伴した。報告書では、「何らかの祭祀的な行為との関連」が示唆されており、集落内部における土地の結界的な意味合いが強いものと考えている。古墳に関係づけられるものでは、八十塚古墳群岩ヶ平支群第10号墳（横穴式石室墳）において、E1トレンチ63層から故意に破碎された甕が1点出土している〔古川編1990〕。破碎行為を裏づける打撃痕跡が体部上半の外側からと、体部下半の内側からとに認められる。口径21.5cm、器高42.9cmを測る中型の甕で、古墳祭祀の例といえよう（第16図9）。横穴式石室墳の墳丘裾部に相当し、結界部分における打割行為による所産とみられる。

第16図8・10は、共に芦屋廃寺跡（W地点）から出土した甕で、前者は礫集積、後者は須恵器集中部から検出されたものである。8は口径19.8cm、残存高38.0cmを計測し、10は口径26.1cm、残存高41.0cmを測る（底部は今回復元）。完品であれば、器高が40～50cmクラスの甕である。10が出土した須恵器集中部の須恵器は多量で、6世紀後半を中心とする時期を示し、7世紀以降のものは認め難い〔長屋・佐藤・森岡・木南1997〕。これらは、廃棄物である可能性も高いが、器種組成などに土器祭祀の様相も看取される。

なお、第16図に掲げてはいないが、特徴的な底部穿孔を示す須恵器甕が藤ヶ谷遺跡第5地点の第2次確認調査5区SX-01から出土している。口径14.5cm、器高22.05cmを測る大きさの中型甕で、底部に焼成後の穿孔が行われ、孔径は8.5cmと大きい。打撃は外面側から行われ、内壁面が剥離するように失われている。8世紀前半に下る資料であるが、土器棺と報告されたものである〔森岡編2003〕。

以上、これらの諸資料は、市内出土の須恵器甕の中にあつて、様相のバリエーションを示すものの、若宮遺跡と酷似した例ではないし、5～8世紀の時期幅も有している。先述したB・D・Eとの関連も含め、総合的な比較は、後考に委ねたい。（森岡）



第16図 芦屋市内および近隣地出土関連須恵器実測図比較集成（上：甕供献・祭祀，下：甕供献・祭祀）



# 引用・参考文献目録

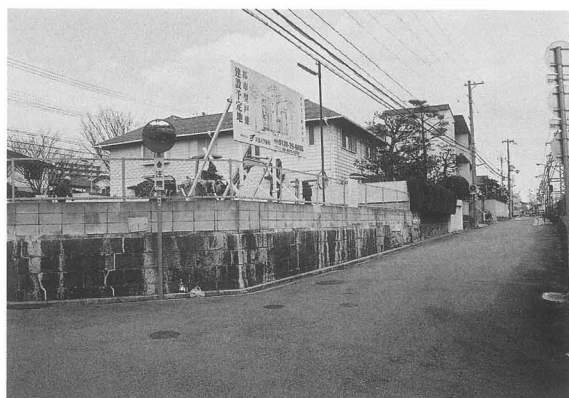
- 芦屋市 2004 『広報あしや』第908号（1月15日号）
- 芦屋市教育委員会 2001 『芦屋廃寺跡（第75地点）公開展示説明会資料 「寺」字刻印土器と芦屋廃寺跡——第75地点発掘調査の成果から——』
- 芦屋市役所 1971 『新修芦屋市史』本篇
- 阿部嗣治 1993a 「津知遺跡の発掘調査(1)『のじぎく文化財だより』17 淡神文化財協会
- 阿部嗣治 1993b 「津知遺跡の発掘調査(2)『のじぎく文化財だより』18 淡神文化財協会
- 伊野近富 1993 「古代～中世洛外産土師器皿の生産と流通」『中近世土器の基礎研究』IX 日本中世土器研究会
- 魚澄惣五郎編 1956 『芦屋市史』本編 芦屋市教育委員会
- 宇野隆夫 1989 『考古資料にみる古代と中世の歴史と社会』 真陽社
- 宇野隆夫 1997 「第2部 中世食文化の諸相 中世食器様式の意味するもの」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 国立歴史民俗博物館
- 岡田章一・別府洋二・中川 渉 1980 『本庄町遺跡』〔兵庫県文化財調査報告書第11冊〕兵庫県教育委員会
- 岡田章一・長谷川眞 2003 「兵庫津遺跡出土の土製煮炊具」『兵庫県埋蔵文化財紀要』第3号 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 片岡 肇編 1985 『神戸市東灘区本庄町遺跡発掘調査報告書』 財団法人古代学協会
- 金田章裕 1992 『微地形と中世村落』〔中世史研究選書〕吉川弘文館
- 川上厚志編 2001 『二葉町遺跡発掘調査報告書 第3・5・7・8・9・12次調査——新長田駅南第2地区震災復興第二種市街地再開発事業に伴う——』 神戸市教育委員会
- 川越俊一・井上和人 1981 「瓦器椀製作技術の復原」『考古学雑誌』第67巻第2号 日本考古学会
- 岸本一宏 1997 「第3章 まとめと考察 第3節 出土瓦器椀について」『本州四国連絡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』〔兵庫県文化財調査報告第159冊〕兵庫県教育委員会
- 小林謙一 1991 「縄文遺跡における廃棄行為復原の試み——住居覆土中一括遺存遺物及び炉体土器の接合関係」『異貌』拾参 共同体研究会
- 佐久間貴士 1984 「発掘された中世の村と町」『岩波講座日本通史』第9巻 岩波書店
- 佐藤公保 1999 「第Ⅵ章 若宮遺跡をめぐる二、三の考証 4.耕作痕の分布からみた芦屋の農耕地の開墾の推移」『若宮遺跡(第1・2地点)発掘調査報告——震災復興住環境整備事業(芦屋市若宮住宅1号館建設)に伴う埋蔵文化財事前調査の成果——』〔芦屋市文化財調査報告第30集〕(森岡秀人・竹村忠洋編)
- 佐藤隆春 1999 「〔付論〕津知遺跡第17地点の地質」『津知遺跡第17地点発掘調査概要報告書——芦屋西部第二地区土地区画整理事業(津知第2公園)に伴う震災復興調査』〔芦屋市文化財報告第34集〕(竹村忠洋編) 芦屋市教育委員会
- 寒川 旭・森岡秀人・竹村忠洋 2001 「芦屋廃寺跡建物基壇と関わる地震痕跡」『日本考古学』第12号 日本考古学協会
- 重藤輝行・竹村忠洋編 1999 『寺田遺跡第95地点発掘調査概要報告書——阪神・淡路大震災復興に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果——』〔芦屋市文化財調査報告第32集〕芦屋市教育委員会
- 篠宮 正 2000 『津知遺跡(第19地点)従前居住者用住宅((仮称)津知町住宅)新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——震災復興事業——』〔芦屋市文化財調査報告第37集〕芦屋市教育委員会
- 白石太一郎 1969 「いわゆる瓦器に関する二、三の問題——古代末～中世初頭における土器の生産と流通に関する一考察——」『古代学研究』54 古代学研究会
- 白井克也 1997 「九州大学考古学研究室所蔵無文土器・陶質土器—九州帝國大學國史學研究室における採集資料」『九州考古学』第72号 九州考古学会
- 鋤柄俊夫 1997 「第1部 中世食器の地域性 6 畿内周辺」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 国立歴史民俗博物館
- 竹村忠洋 2002 「Ⅰはじめに」『若宮遺跡(第3・4・10・11・16・17・25・31・32・33・34地点)発掘調査概要報告書——若宮地区住環境整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果——』〔芦屋市文化財調査報告第38集〕芦屋市・芦屋市教育委員会
- 竹村忠洋 2003 「Ⅳ まとめ 2節(6) 古代末から中世の津知遺跡」『津知遺跡第142地点ほか発掘調査報告書——芦屋西部第二地区震災復興土地区画整理事業に伴う震災復興調査の成果——』〔芦屋市文化財調査報告第46集〕芦屋市教育委員会
- 竹村忠洋編 1999 『津知遺跡第17地点発掘調査概要報告書—芦屋西部第二地区土地区画整理事業(津知第2公園)に伴う震災復興調査』〔芦屋市文化財調査報告第34集〕芦屋市教育委員会
- 辻 康男 2001 「芦屋川・宮川流域沖積扇状地における更新世末期以降の地形発達史と遺跡形成過程——縄文時代後期～弥生時代前期の堆積環境を中心として——」〔第98回近江貝塚研究会発表要旨・資料〕
- 辻 康男 2002 「Ⅱ 若宮遺跡とその周辺 1 地理的環境」『若宮遺跡(第3・4・10・11・16・17・25・31・32・33・34地点)発掘調査報告書——若宮地区住環境整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果——』〔芦屋市文化財調査報告第38集〕 芦屋市・芦屋市教育委員会

- 辻 康男・森岡秀人・竹村忠洋 2001 「六甲山地南麓における沖積扇状地の層序と考古遺跡の形成過程について——芦屋川・宮川流域の事例——」〔第36回低湿地遺跡研究会発表要旨・資料〕
- 長屋幸二・佐藤康二・森岡秀人・木南アツ子 1997 「芦屋廃寺遺跡（W地点）の発掘調査」『平成7年度国庫補助事業 阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書』〔芦屋市文化財調査報告第28集〕芦屋市教育委員会
- 橋口達也 2004 『護宝螺と直弧文・巴文』 学生社
- 広瀬和雄 1986 「中世への胎動」『岩波講座日本考古学』6 変化と画期 岩波書店
- 福島孝行・上垣幸徳・藤井 整 1999 「V.2.(5) 出土遺物」〔芦屋市文化財調査報告第30集〕前掲書
- 藤田三郎 1986 「Ⅲ.土坑SX101の埋積と遺物の廃棄」『唐古・鍵遺跡第20次発掘調査概報』 田原本町教育委員会
- 古川久雄編 1990 「芦屋市八十塚古墳群岩ヶ平支群第10号墳の調査」〔芦屋市文化財調査報告第20集〕芦屋市教育委員会
- 前田 昇 1971 「芦屋の自然環境」『新修芦屋市史』本篇 芦屋市役所
- 前田佳久・平田朋子・中居さやか 2002 「寺田遺跡発掘調査報告書 第127・130・132・133地点——都市計画道路山手幹線街路事業に伴う発掘調査——」〔芦屋市文化財調査報告第43集〕芦屋市・芦屋市教育委員会
- 南 博史編 1985 「芦屋市寺田遺跡発掘調査報告書」 財団法人古代学協会
- 武藤 誠・村川行弘 1971 「考古学上からみた芦屋」『新修芦屋市史』本篇 芦屋市役所
- 村川行弘 1970 「芦屋廃寺址」〔芦屋市文化財調査報告第7集〕芦屋市教育委員会
- 村川行弘 1971 「考古学上からみた芦屋」『新修芦屋市史』本篇 芦屋市役所
- 村川行弘・石野博信・森岡秀人 1985 「増補 会下山遺跡」〔芦屋市文化財調査報告第3集 再刊〕芦屋市教育委員会・明新社
- 森 隆 1990 「畿内における古代後半の土器様相」『シンポジウム「土器からみた中世社会の成立」』
- 森岡秀人 1988 「古墳時代の芦屋地方（下）」『兵庫県の歴史』第24号 兵庫県史編纂室
- 森岡秀人 2002a 「Ⅳまとめ」『若宮遺跡（第3・4・10・11・16・17・25・31・32・33・34地点）発掘調査概要報告書——若宮地区住環境整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果——』〔芦屋市文化財調査報告第38集〕芦屋市・芦屋市教育委員会
- 森岡秀人 2002b 「摂津・八十塚古墳群と菟原郡葦屋郷・賀美郷の古代史」『八十塚古墳群の研究』〔関西大学文学部考古学研究報告第7冊、芦屋市文化財調査報告第33集〕関西大学文学部考古学研究室
- 森岡秀人 2003 「寺田遺跡における掘立柱建物と本地点のSH01について」『平成12・13年度国庫補助事業 寺田遺跡（128地点）発掘調査報告書』〔芦屋市文化財調査報告第47集〕芦屋市教育委員会
- 森岡秀人編 2003 「摂津・藤ヶ谷古墓——藤ヶ谷遺跡第5地点・古代火葬墓の調査」芦屋市教育委員会
- 森岡秀人編 2004 「前田公園建設事業に伴う前田遺跡（第20地点）発掘調査概要報告書——弥生前期水田跡の構造と水利動態——」〔芦屋市文化財調査報告第52集〕芦屋市・芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・竹村忠洋 1999 「第Ⅵ章 若宮遺跡をめぐる二、三の考証 1. 臨海部に立地する本遺跡の性格」〔芦屋市文化財調査報告第30集〕前掲書
- 森岡秀人・竹村忠洋編 1999 「若宮遺跡（第1・2地点）発掘調査報告書」〔芦屋市文化財調査報告第30集〕前掲書
- 森岡秀人・竹村忠洋編 2001 「芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図および利用の手引き」〔芦屋市文化財調査報告第40集〕芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・白谷朋世・和田秀寿編 1993 「芦屋市埋蔵文化財包蔵地分布地図および利用の手引き」〔芦屋市文化財調査報告第24集〕芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・白谷朋世 1993 「平成4年度国庫補助事業 芦屋市内遺跡発掘調査概要報告書」〔芦屋市文化財調査報告第23集〕芦屋市教育委員会
- 森岡秀人・村川義典 1996 「第6章 摂津国」『兵庫県の考古学』（村川行弘編） 吉川弘文館
- 森田克行 1990 「摂津地域」『弥生土器の様式と編年』近畿編Ⅱ（寺沢薫・森岡秀人編） 木耳社
- 森田 稔 1986 「東播系中世須恵器生産の成立と展開——神出古窯址群を中心に——」『神戸市立博物館研究紀要』第3号 神戸市立博物館
- 安田 滋編 2001 「住吉宮町遺跡 第24次・第32次 発掘調査報告書——阪神・淡路大震災復旧・復興事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書——」 神戸市教育委員会
- 山田清朝・服部 寛 2000 「寺田遺跡（第117～124地点）」『平成11年度 年報』 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所
- 山仲 進 1986 「Ⅳ.考察2. 神出窯における系譜、構造、編年」『神出1986——神出古窯址群に関連する遺跡群の調査——』妙見山麓遺跡調査会
- 吉岡康暢 1997 「第1部 中世食器の地域性 総括」『国立歴史民俗博物館研究報告』第71集 国立歴史民俗博物館
- 六甲山地土石流団体研究グループ 2001 「六甲山地南麓扇状地での土石流・洪水堆積物の堆積時期・堆積場の変遷」地球科学55-4
- 若林邦彦 1994 「弥生土器廃棄行為に関する覚書——亀井遺跡SK3060出土土器群を中心に——」『考古学と信仰』同志社大学考古学シリーズⅣ（森浩一編） 同志社大学考古学研究室
- 和田秀寿 1994a 「よみがえる津知の歴史Ⅰ（中世編）——津知遺跡が語るもの——」『なりひら』芦屋市立美術博物館だよりVOL.16・'94/9 芦屋市立美術博物館
- 和田秀寿 1994b 「よみがえる津知の歴史Ⅱ（原始・古代編）——津知遺跡が語るもの——」『なりひら』芦屋市立美術博物館だよりVOL.17・'94/12 芦屋市立美術博物館

図版 ①



調査地遠景（北西から）



調査地遠景（西から）



調査前の状況（南西から）



調査開始状況（北から）



1区 機械掘削後の状況（西から）



1区 完掘状況（北から）



1区 東壁土層断面（西から）



1区 北壁土層断面（南から）

図版 ②



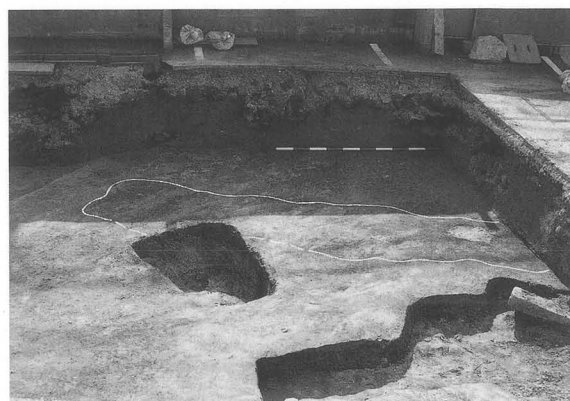
2区 機械掘削風景（南から）



2区 機械掘削後の状況（南から）



2区 調査風景（南から）



2区 SD101 検出状況（東から）



2区 SD101 完掘状況（南から）



2区 須恵器検出状況（南から）



2区 北壁土層断面



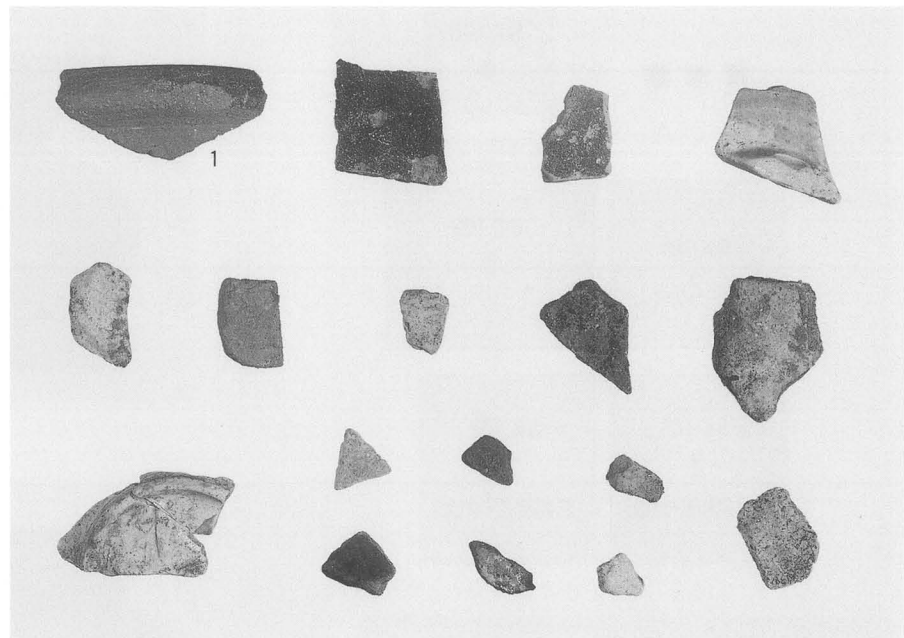
出土遺物



# 図版 ③

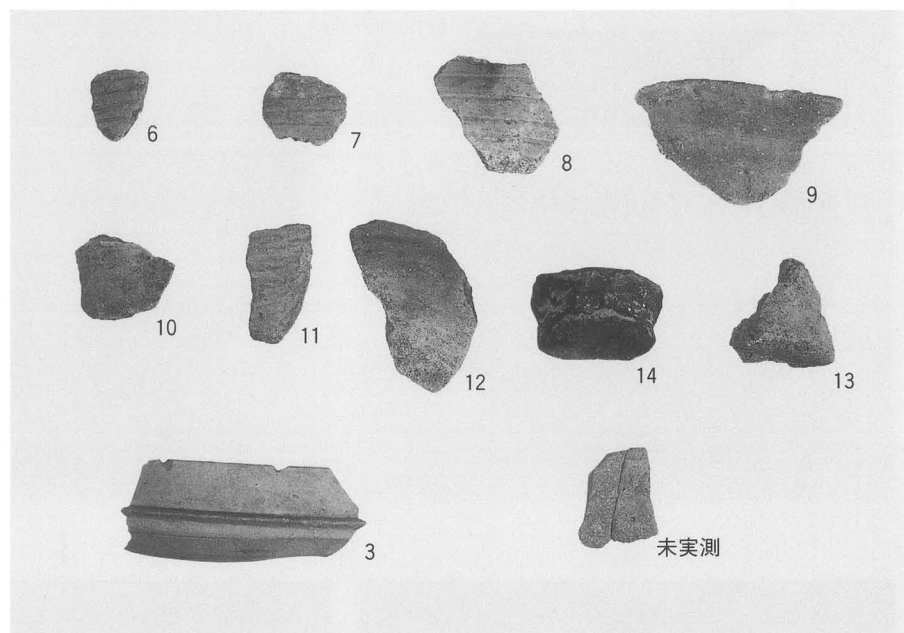
3層出土遺物

(1:1区、他:2区未実測)



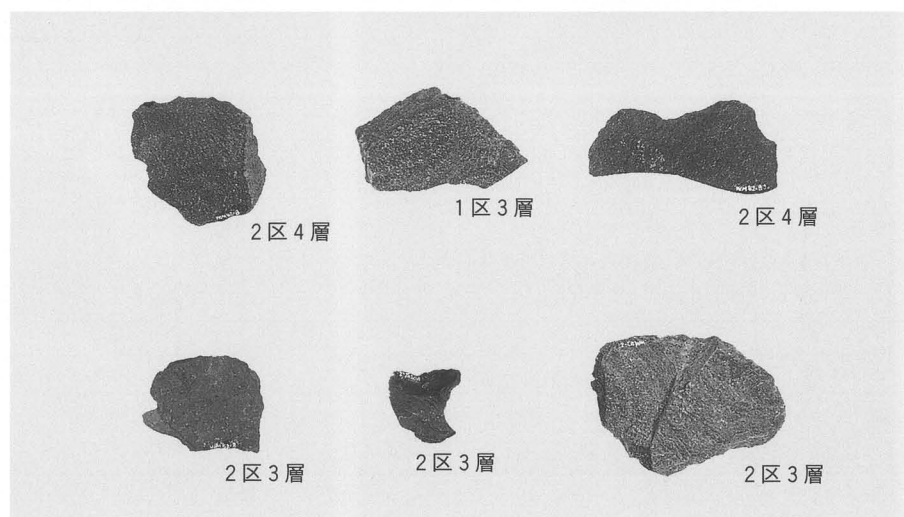
第1遺構面出土遺物

(SK101、SD101、4層)



3・4層出土石器

(下段中央:チャート、  
他:サヌカイト)



図版 ④

須恵器

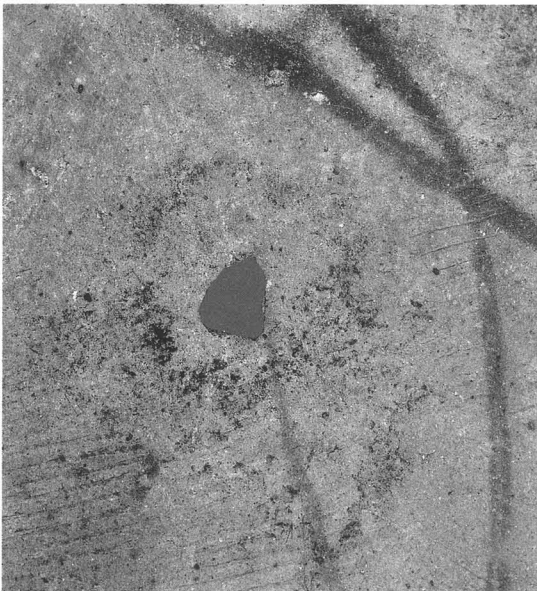
SK102  
4

SK101  
2

SK102  
5

SK101  
2  
(底部穿孔・外面)

SK102  
5  
(底部穿孔・内面)



## 報告書抄録

ふ り が な	わかみやいせき（だい42ちてん）はくつちようさほうこくしょ
書 名	若宮遺跡（第42地点）発掘調査報告書
副 書 名	須恵器集中遺存地点の調査と成果
巻 次	
シ リ ー ズ 名	芦屋市文化財調査報告
シリーズ番号	第58集
編 著 者 名	森岡秀人・坂田典彦
編 集 機 関	芦屋市教育委員会 文化財課
所 在 地	〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号 TEL. 0797-31-9066
発 行 年 月 日	2005年（平成17年）3月31日

所 収 遺 跡 名		若宮遺跡(第42地点)		確認調査担当者 竹村忠洋		
				発掘調査担当者 森岡秀人・坂田典彦		
所 在 地		兵庫県芦屋市打出小槌町174番地				
コ ー ド		北 緯	東 経	調 査 期 間	調 査 面 積	調 査 原 因
市町村	遺跡番号	34°43′41″	135°18′59″	(確認) 20040302	(確認) 5.95㎡	専用住宅建設に伴う事前調査
28206	WM42			(発掘) 20040405～ 20040409	(発掘) 70㎡	
所収遺跡名	種 別	時 代	主な遺構	主 な 遺 物	特 記 事 項	
若宮遺跡 (第42地点)	居住域 および 墓域	古墳時代	土坑	須恵器	・ 完形の須恵器が3点出土し、墓域になる可能性が考えられる。 仮器としての性格が興味深い。 ・ 弥生時代前期における当遺跡の北方への広がりを把握。	
		弥生時代	溝	弥生土器		

## ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆ 編集後記 ◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

若宮遺跡は、その存在が以前から予測されてきた海浜部の新しい遺跡である。ともに大阪湾北岸を形成する神戸市域東部では、過去に北青木遺跡や深江北町遺跡など有数の集落遺跡や墓地がみつかり、似たような遺跡が本市域で想定されることもごく自然な成り行きであった。

震災復興を目的とした埋蔵文化財の確認調査は、若宮住宅建設予定地でこの遺跡と初めて遭遇し、メスを入れはじめると、意外な手ごたえを感じる調査例が次々と続いた。今はこの地区の発掘調査はかなり下火になっているが、それでも阪神沿線の北側で本地点の調査状況があらさまとなり、この遺跡のもつ性格や様相の難しさが改めて問題となった。

本書はそれに十分応えきれていないが、今後類例を積み重ねる中で、遺跡の中に占める生活空間としての役割、墓地の一角としての機能などを明らかにしていきたい。

予想以上の出土品があって、事業者も当惑されたことと思われるが、本書の刊行まで原因者としての協力を果たされた。感謝の気持ちで一杯である。

(森岡秀人・坂田典彦)

表紙・裏表紙 須恵器実測図〔実測・製図 天羽育子〕

甕（土坑SK102出土、スケール2分の1）

甕（土坑SK101・102出土、スケール2分の1）

芦屋市文化財調査報告 第58集

### 若宮遺跡(第42地点)

### 発掘調査報告書

——須恵器集中遺存地点の調査と成果——

印刷発行 平成17年(2005)3月31日

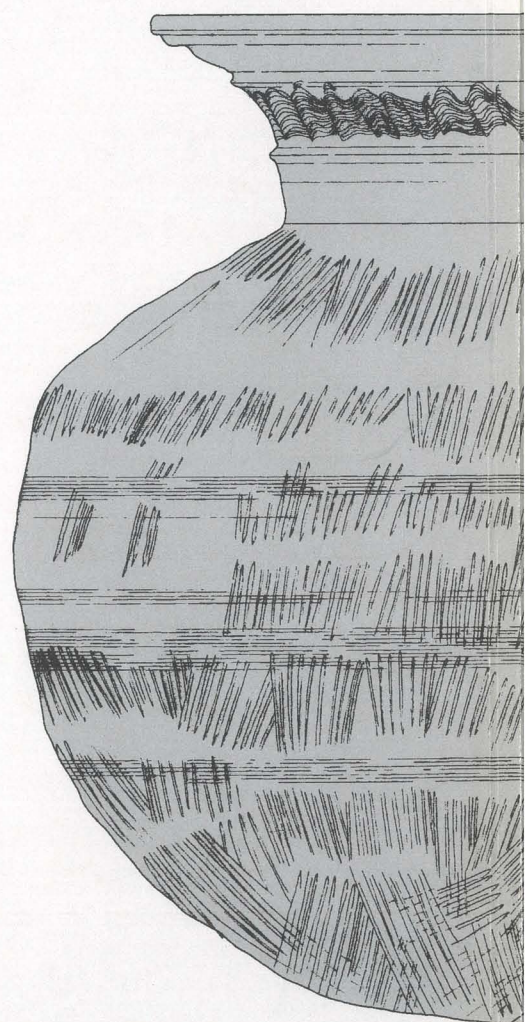
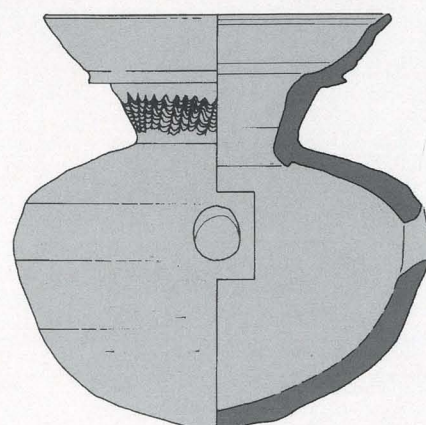
発行者 芦屋市教育委員会  
〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号  
TEL 0797-31-9066 FAX 0797-38-2089

編集者 芦屋市教育委員会社会教育部文化財課  
〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7番6号  
TEL 0797-31-9066 FAX 0797-38-2089

印刷 大和出版印刷株式会社  
〒658-0031 兵庫県神戸市東灘区向洋町東2丁目7-2  
TEL 078-857-2355 FAX 078-857-2377



# Ashiya Archaeological Record 58



2005.3

Ashiya City Board of Education, Japan